明治四十三年六月二十日發行

(明治二十一年本會創立)

婦人衛生雜誌

第二百四十七號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
每月一回二十日發行
內務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第二百四拾七號目次

講演

○血の話　醫學博士　二木謙三
○月經の話（承前）　醫學士　河島右一

叢談

○鼻の話
○活ける家（承前）
○乳房の話（承前）
○生活上改良すべき點（承前）
○不妊症及び其治療（承前）
○美容法（承前）

育兒

○小兒急癇
○小兒取扱法の誤り
○小兒の怪我（承前）

家庭衛生

○日常生活の衛生
○衛生雜信（二）
○食事の注意（承前）

大日本婦人衛生會記事

○本會總會竝懇親會
○本會例會及講話會
○新潟支會地久節祝賀式
○本會入會者
○新潟支會入會者
○改姓名
○轉居

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみにして足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相寄て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜はしきことなりされども其の衛生の事に至りては更に注意なきかさるものゝ如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす玆に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要（明治卅二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を增進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員證を交付す（交付手續は末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戾せす

●第九條　本會に推薦員を置き其中より總裁一名を奉し皇族の妃殿下に願出るものとす

●第十條　本會に左の役員を置く會長一名副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌理し幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の件

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め開遊會を開くことあるべし

●第十七條　每會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして隨意聽講せしむるものとす

●第十八條　會員に家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）

●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁す

●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと

●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし

●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす

●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第廿八條　本會の雜誌は支會に同送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ

●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし

●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは其他物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿册に登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし

●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものには受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）

●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麹町區富士見町郵便取扱所宛）振出しあるべし

●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢く會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麹町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

總裁　東伏見宮依仁親王妃　周子殿下

會長　侯爵夫人　鍋島榮子

副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　船山春子
同　羽田三緒子
同　岡田德子
同　高木鎔子
同　山本多穗子
同　松平芳子
同　三浦敬子

評議員　石川貞子
同　岩下ゆか子
同　濱田捨子
同　長谷川仲子
同　服部繁子
同　仁禮壽賀子
同　西升子
同　土肥多越子
同　緒方悅子
同　岡山とし子
同　小川孝子
同　男爵夫人加藤鈴子
同　片山總子
同　吉武輝枝子
同　丹波貞子
同　高橋事子

評議員　田村きよ子
同　男爵夫人南部限子
同　中濱芳子
同　山口貞子
同　子爵夫人松井正子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮本樂子
同　宮下咲子

●支會、新潟、山形、宇都宮、高崎、米澤

本會特別賛成員（いろは順）

醫學博士　入澤達吉君
理學博士　石川千代松君
醫學士　石原久君
醫學士　石原喜久太郎君
理學博士　飯島魁君
ドクトル　飯盛挺造君
醫學博士　伊藤隼三君
ドクトル　伊澤信平君
醫學博士　伊東祐彦君
色川圀士君
岩井禎三君
藥學博士　石津利作君
醫學士　磐瀬雄一君
長谷川泰君
法學博士　鳩山和夫君
萩原彌四郎君
醫學博士　林春雄君
原胤昭君
醫學士　橋本左武郎君
醫學博士　濱田玄達君
男爵　濱尾新君

醫學博士　芳賀榮二郎君
西田敬止君
ドクトル　西山信光君
本田增次郎君
醫學士　鳥居春洋君
醫學博士　土肥慶藏君
醫學博士　遠山椿吉君
醫學博士　大澤謙二君
醫學士　大野豐太君
醫學士　大西秀治君
子爵　小笠原長生君
ドクトル　小此木信六郎君
醫學博士　岡田榮吉君
醫學博士　岡田和一郎君
恩田重信君
醫學博士　緒方正規君
醫學士　大澤岳太郎君
醫學博士　渡邊房吉君
醫學博士　加藤照麿君
法學博士　文學博士　男爵　加藤弘之君
醫學士　河野衛君
醫學博士　河本重次郎君
醫學博士　金杉英五郎君
醫學博士　片山國嘉君
醫學士　賀古鶴所君
醫學士　澤田鉛一郎君
醫學士　唐澤光德君
醫學士　甲野棐君
醫學士　米山彦郎君
橫井忠國君
醫學博士　高橋順太郎君
男爵　高崎正風君
高嶺秀夫君
醫學士　高田畊安君
ドクトル　高山紀齋君
藥學博士　田原良純君
醫學博士　田代義德君
醫學士　田村光顯君
醫學士　田村化三郎君

醫學士　竹中成憲君
藥學博士　丹波敬三君
法學博士　高木豐三君
醫博、男爵　高木兼寬君
理學博士　坪井正五郎君
醫學博士　土田卯三郎君
男爵　辻新次君
醫學博士　中濱東一郎君
醫學博士　長與稱吉君
藥學博士　長井長義君
男爵　南部[illegible]男君
醫學博士　能勢靜太君
醫學博士　久保猪之吉君
醫學博士　栗本東明君
醫學士　栗本庸勝君
醫學博士　隈川宗雄君
醫學博士　吳秀三君
醫學博士　山田鐵哉君
醫學士　山田弘倫君
醫學士　山根正次君
ドクトル　山上兼輔君
ドクトル　松山陽太郎君
丸山長四郎君
ドクトル　富士川游君
布施正顯君
男爵　後藤新平君
醫學士　古川榮君
小高良造君
小西信八君
醫學士　寺田織尾君
醫學士　寺田豐作君
寺田勇吉君
醫學博士　朝倉文三君
子爵　秋元興朝君
足立寬君
ドクトル　朝山義六君
醫學士　淺田決君
醫學博士　佐藤達次郎君
醫學博士　佐々木政吉君
醫學博士　榊順二郎君

醫學博士　榊保三郎君
醫學博士　櫻井恒次郎君
醫學博士　佐藤三吉君
齋藤清文君
醫學士　笹川三男三君
醫學士　櫻井郁二郎君
ドクトル　佐藤運雄君
醫學士　佐藤德齊君
醫學士　澤崎寬制君
ドクトル　佐伯理一郎君
醫學博士　木下正中君
醫學博士　桐淵鏡次君
醫學博士　木村德衛君
醫學博士　北島多一君
醫學博士　北里柴三郎君
醫學士　北村樹造君
醫學博士　北川乙治郎君
ドクトル　菊池猪一君
醫學博士　三輪信太郎君
醫學博士　宮本叔君
醫學博士　宮本仲君
宮川保全君
理學博士　箕作佳吉君
水原漸君
醫學博士　三宅秀君
醫學博士　三浦謹之助君
醫學博士　三島通良君
醫學博士　三浦守治君
島田三郎君
ドクトル　志村誠陸君
醫學博士　島村俊一君
ドクトル　日高昂君
醫學博士　弘田長君
伯爵　土方久元君
醫學士　百瀨玄溪君
醫學士　森川正馬君
文學博士　森林太郎君
醫學士　澄川德君
ドクトル　須田卓郎君

婦人衛生雜誌第二百四十七號
(明治四十三年六月二十日發行)

講演

血の話

醫學博士　二木謙三

今日は私に血液の話をしろと云ふ仰せでございましたので少し調べて見ましたが、解りよくお話が出來ますか何うですか解りませぬが一通りお話し致します。

先づ血液の沿革から申しますと、血液と云ふことに就いては昔の其の昔、此の人間が出來るともう忽ちに其研究が起つたのであります、今の時代でございますと叡聖なる陛下の御徳に依りまして、吾々は此處に靜かに落付いてお話もし、諸姉もお話を聽かるる有難い御代でございますけれども、遡つてモット昔の太古の時代を考へて見ますと、人と猛獸との爭は始終絶えなかつたのであります、獸類は人の爲に射られ人は猛獸の爲に咬まれて居つた、其射られた所の獸、咬まれた所の人間の身體からは何が出て參りませうか、一番眼に著くのは彼の鮮紅なる血液であります、流れ〳〵て止みませぬ血潮と共に、呻く所の聲は山に響き谷に亙り靜かに漸く弱くなつて行く、出る所の息は多く入る所の息は少くなつて來るさうして遂に出た所の息は天空に昇つて歸らずなるのであります、此所に到つて血液は生命の源であると云ふことは、如何なる野蠻人の頭腦にでも直ちに浮ぶ考であります、宜なる哉西洋の歴史に徵しますと云ふと、彼の歐洲の文明の中心であつた所の、否歐洲のみならず世界文明の中心であつた所の、チグリス河の上流ニニブの古蹟に於て掘起された、石に刻んである今の世には讀み難き彼の楔形の文字で書

いてある一つの文がありました、其文の中に何と書いてありましたかと申すと血液は生命の源であると書いてある、それから降つて紀元前四百餘年の醫聖ヒポクラテスの說に依りますと、血液は空中より靈氣を吸ふて之を人間の身體に送るものである、死の直前に於て此靈氣は人間を去つて再び天に歸るのであると云ふのです、それから昔の支那の歷史を調べて見ますると、彼の伏犧神農と並んで醫者の聖人と呼ばれた岐伯が黃帝の問ひに答へたことが或書に書いてある。

夫脈者血之府也。長則氣治。短則氣病。數則煩心。大則病進。上盛則氣高。下盛則氣脹。代則氣衰。細則氣少。濇則心痛。渾々革至如涌泉。病進而色弊。緜々其去如弦絕死。

斯う書いてあります、要するに此血液と共に吾々が天より享くる所の氣の働きで人間は生きて居る、其變化と共に種々の病が起る、其滅びると共に人間が死ぬ、斯う云ふことが醫者の聖敎となつて居る、それから四千年後の今日に於ては學術の進步則ち物質的の研究が進みまして、實に驚く程になつたのであります、併しながら如何に物質の研究が進んでも歸する所に至つては矢張り昔も今も同じである、先づ沿革は是れ位に致しまして次には血液の循環と云ふことをお話致します。

血液は心臟の左の室から出てそれから多くの血管を通つて全身に環るのである、其初めは凡て母指位の太さの管であるが、其血管が二つに分れ枝を咲き咲きして段々小さくなつて髮の毛程の血管になり、又それが分れ〳〵て遂には顯微鏡でなければ見えないやうな血管になる、其血管が全身到る處に瀰漫して居つて、何處を針で突いても血の出ない處はない位になつて居る、そうして其分れた末は諸々の臟器に這入つて其臟器を養ふのであります、詰り其臟器に必要な精分を血から養つて、其剩つた所を血は又運んで歸る、誠に親切なものである、其臟器を出る時にはどうであるかと云ふと、細い管が集り集つて髮

の毛程の管になり、それが又集つて遂には母指位のものになつて心臓に歸つて來るのである、心臓に歸つてから再び心臓の右の室から出て肺に這入つて行く、肺臓では前と同じ仕方で分れて細くなつて環るそれが再び集つて大きな枝となり幹となつて左の心臓に歸る、之を血液の一循環と云ふのであります、それから其血液を朝から晩まで廻らして居る働力は何處から來るかと云ふと心臓から來るのであります、心臓の働きと云ふものは實に非常なものであります、一囘に何の位の力を以て血液を心臓から外に追ひやるかと云ふと、即ち七十グラム（日本の桝目にて凡そ四勺弱）の血液を二メートル（六尺程）の高さまで抛げ上げる力を有つて居る、それを一晝夜の働きに合算して見ますと凡そ千八百キログラムメーターと申して、之を日本の桝目と尺に直して見ますと一晝夜に凡そ九十石の水を三尺の高さに抛げ上げる力を心臓が有つて居る、唯九十石と言つた丈では何れ位であるか想像がつきませぬが、解り易く言ふと四斗樽に二百二十五杯であります、之を心臓は三尺の高さまで抛げ上げるのであります、何うです諸姉の中に一晝夜に四斗樽に二百二十五杯の水を運んで、三尺の高さまで抛げ飛ばすことの出來る方がありますか、恐らく有りますまい、梅ケ谷や常陸山を雇つて來ても迚も出來まいと思ふ、之を心臓は一晝夜にするのであります、そうして翌日疲れたとも言はずに又毎日早朝から働いて居るのです、それから血液は人間の身體を何れ位早く廻りますかと云ふと今お話した通り心臓を出て細い血管を通つて、又心臓に歸つて來る時間は僅に二十二秒であります、之を一晝夜に計算すると四千三百二十囘血液が全身を循環することになる、所で人間の精力の極點は何の位かと云ふと、觀音樣のお百度參りかお千度參りが其極點でありますが、それを血液は一日に四千度廻つて居るのであります。

次には血液とはどう云ふものであるかと云ふことを皆さんにお話せにやアならぬ、血液と云ふものは即

ち咬まれた所の人、射られた所の動物の身體から流れ出る赤い液である、此液は普通の水のやうなものではない、之を管に取つて見ると透明でなくて不透明なものである、丁度吾々が三度に戴く所のお茶は澄んで居る、又毎朝戴きます味噌汁は濁つて居る、丁度血液は味噌汁に似て居ります、味噌汁の中には味噌の細かな粒々が這入つて居ることは誰にも想像がつきますが、血液の中にも矢張り血球と云ふ細かな粒々が這入つて居るからして、味噌汁の不透明な如く血液も不透明であります、此血球には種々な種類がありますが、此種類に就ては後でお話を致します、此血液より血球を除きましたならば何が殘るかと云ふと、血液を取つて血球を下へ沈ませて見ると上の方にあるのは無色の流動體であります、之を吾々は血漿と申します、此血漿と血球との間に白濁した白い層がある、是は血小板と申します、詰り血液は血球と血漿と血小板とが集つて成立つて居るのです、總て血液は之を空中に取出して置くと凝固すると云ふことは御承知と思ひます、血液が凝固すると透明な液が上に浮んで其下に暗黑色な血の塊が出來る、是が血餅と云ふのであります、上に浮いて居る透明なのが血淸である、詰り凝固して出來た液は血淸、凝固しないで出來た液が血漿と云ふのです、それから血球には幾種類あるかと申すと、赤血球と白血球と血小板との三色あるのであります、赤血球と云ふのは血液に赤い色を與へるものであつて、是が血液の中に澤山あります、其形は上から見ると圓いもので、横から見ると下手に書いた一の字の、中に窪んだ所のある圓盤狀のものであります、之を形容して見ると丁度餡麵麭のやうな形で緣の方が厚く中央が少し凹んで居る、色はどうかと云ふと帶赤黃色であつて、是が幾つも重なると眞赤な色になるのです、丁度海の水は靑く見えますが、之を小さな茶碗に取ると色がないのと同じ譯であります、其組織はどう云ふ風であるかと云ふと、中は皆な網の目のやうに出來て居りまして、少し堅い蛋白質の絲で縱橫

無數に編んである海綿狀組織に出來て居る、其海綿狀組織の中に何が浸込んで居るかと云ふと、此中には赤い液が這入つて居る、丁度海綿を赤い水に浸したのと同じ事であります、其赤い水が外に滲み出すのを防ぐ爲に一つの薄い膜で之を包んで居る、丁度海綿狀組織の餠麵麭が薄皮で包まれて居るのと同じ工合であります、それから何故赤血球は眞丸くなく此樣な餠麵麭形にしたのであるかと云ふと、是は自然が旨く考へて成べく大きな面積を有たせなければならぬ爲に平たく推しつぶして眞中を窪まして拵へた、後に血球の效用の時になるとお解りになりますが、中々大きな面積を有たせなければならぬのである、是が又狹い所を通る時には二折にも三折にもなつて通る、其軟かさは餠麵麭のやうに堅くなく、子供の玩具の風船玉に水を入れて手に載せたやうな此程柔かなものはない程である、併し容易に壞れぬやうに出來て居る、それから白血球は無色の眞圓いものであつて、其組織は多くの粒から出來て居る、例へて見ると下手に拵へた握飯のやうで御飯の粒の樣な顆粒から出來て居る、さうして其中には核と云ふものがある、丁度握飯の中に梅干を入れたと同じ事である、それで白血球は唯圓い形をして居るばかりでなく、勝手に自分で色々な形に變ずるのであります、所謂アミーバ運動をして居る、赤血球には運動力はないが白血球には自由自在に運動する力がある、血小板は赤血球や白血球よりは一層小さなものであつて、其組織は恰も海月のやうなものである、中はどうなつて居るか解らぬ程單純に柔かい物で出來て居ります、之に就ては運動があるとか無いとか云ふ色々な議論がありますが今日の所では先づ運動はないものと思つて居つて願ひます。

それから血液は人間の體内に何れ位あるかと云ふと體量の十三分の一と云ふから十三貫の人は一貫目の血液を有つて居る、一貫目の血液は日本の桝目で二升位になる此二升の中に血球が幾つ這入つて居るかと云ふと、凡そ一ミリメーター立方丁度粟粒より

少し大きい位の血液の中に血球が五百萬程ある、若し之を人間の身體中にある二升の血液とすると約二十兆と云ふ數になる、道の二十町なら短いものでテク〳〵歩いて行けますけれども……唯數で二十兆と言つたゞけではちよつと想像がつきませぬが例を取つて見ると世界の人口は幾らあるかと云ふに、日本支那、獨逸、印度等の總てを合せて世界の人口を合しても只十億しかない、即ち三千世界とお釋迦樣が仰有つたがそれでも足りない、二萬世界の人口を合せなければ一人の體にある血球の數に及ばないのであります、全體人間は數を算へるに何れ位の能力を有つて居るかと云ふと、一二三四を百まで算へるのに最も速い者でも二十秒かゝる、二十秒で百算へる者で一箇年に何れ位數へる事が出來るかと云ふと、朝起きて三度の食事もせずに每日々々一二三四と勘定した所で、一ケ年かゝつて僅に一億五千五百萬しか出來ない、世界の人口は八年ばかりで數へきれるが、人一人の血球を算へるには神武天皇時代から今日まで二千五百年間、朝から晩まで飲まず喰はず息まず眠らずに其人が死んだら其子、其子が死んだら孫と云ふやうに二千五百年で何れだけ出來るかと云ふと、二千八百八十八億しか數へられない、それより血球の數はまだ七十倍もある、即ち神武天皇の時代から今日までの七十倍も經なければ、算へられない程血球は澤山あるのであります。（以下次號）

月經の話（承前）

醫學士　河島右一

次に此席にお出の方々は、近き將來に於て皆結婚を爲さるべき位地にある方々であります。それで日本の習慣として、又一般の習慣として、生殖の事に就て口にすることを嫌がつて居る、病氣があつても成るたけ言はぬ、月經さへ言はぬのですから病氣と云ふに就ては誰も祕して言はないのであります、勿論それは嫌な事だらうとは思ひますが併し一般に言は

ない、言はないで置いて濟むならば宜いが、決してそれで濟まないのみならず惡くなるに定つて居る、炎衝があれば炎衝を增すと云ふやうに惡くなるともよくなる氣遣はない、其結果として向來不妊症を起すとか、或は他の疾患を起して終生拭ふべからざる汚點を付けると云ふことになるのであるから、若し疾病があるとしたならば、直にそれを訴へて其處置をするやうにしなければならぬ、或方々のお話に據ると、是までは病氣があつても自分が一般の風習に拘泥して言はないで置いて、結婚前に至つて非常に煩悶した、自分は月經時に非常な苦痛がある、又平素にも非常な異狀がある、若も自分が結婚したならば此病氣が加はりやしまいかと云ふことを、結婚の問題が起ると共に非常に煩悶して、已むを得ず其事を親に訴出でた爲めに、非常に驚いて直に專門醫に診せて、適當なる療治を施して結婚なさつたと云ふ方もあります、是は畢竟病氣と云ふことを言ふのを愧ずる所からして、遂に結婚前に於て狼狽をしなければならぬことになつたので、それが癒る病氣であつたならば宜いが、若も癒らない病氣であると、終生の不幸を招ぐことになりますから、病氣を祕すと云ふことも程度問題にして、絕對的に匿して後に悔ゆるやうなことのないやうにして戴きたいと思ひます。

それで此の時期に於て一番苦痛を感ぜらるゝ症狀は月經痛であります、卽ち月經時に腰が痛む、腹が痛む、是には色々の原因がある、其の原因を申上げると長くなりますから止めるとして、之に就ての養生法を御話したいと思ひます、月經痛のある方は、成るたけ外の人よりも安靜にして私が前に申上げた養生法を勵行して頂きたいと思ふ、其他に養生法としてやつて頂きたいのは痛みが來たならば、下腹部を微溫湯で濕布をして頂きたい、さうすると下腹部の血液の循行が宜くなつて、月經痛が輕くて濟む、或は痛みがなくなることがあります、又さう云ふ月經痛のある方は大抵便祕の方が多い、故に便祕した場

合でなくとも、月經が來ると云ふ時刻が分つて居つたならば、其十日前又は一週間前から便通を附けるやうにして、月經中も便通が十分にあるやうにして頂きたい、便通を良くすると云ふことに對しては、何回も御講演がございましたから御承知でございませうが、藥を服むとか何とか種々な方法がありませう、けれどもそれを一時的にやつたのでは決して利かない、必ず持續的にやらなければならぬ、少くとも十日間位やつて見なければならぬ、一遍服んで又三日なかつたら服む。それぢやいかない、毎日々々服んで習慣を付ける、さうして十日間も服んで今度は量を減らして行く、さうすると腸の蠕動を導いて來るやうになるから、成るべく持續的に行つて便祕を直すやうにする、特に月經のある一週間前から便通を宜くすると云ふことをお心掛けになつた方が宜いと思ふ。

斯の如く養生法を申上げましたが、若し養生法を守らないで居つたならば其の結果として何う云ふ事が來るかと云ふことも亦お考になつた方が宜いと思ふ、又其惡い結果を來すと云ふことを知らないと養生法も十分に勵行が出來ぬかも知れませぬ、そこで不養生の結果として起る症狀は色々あります、普通起り易いのは卵巢炎で、卵巢に炎衝を起すと云ふことがあります、下腹部の右の方が非常に張つて痛みが來る、熱が出る、歩くにも困ると云ふやうな症狀が起つて來る、夫れは何の爲めの病氣か自分には分らない、けれどもさう云ふ症狀を呈するのは卵巢炎と云ふのであります、此の卵巢は大切なものであります、卵の製造をする場所であつて若し之が病氣をすると遂に不妊症と云ふ一種の不具になるのでありますから、十分御注意をなさらなければなりませぬ、又子宮の內が爛れる、子宮內膜炎或は出血性子宮內膜炎を起したり、子宮周圍炎と云ふて周圍に炎衝を起して化膿するやうな病氣を惹起して、遂には切開をしなければならぬと云ふやうなひどいのもありますが兎に角月經が不調になつて、毎月あつたり

なかつたり、或は毎月二度あると云ふやうな異狀を來す、さう云ふ事の爲めに直接なり間接なり非常な損害を御自身の身體に遺すこともあり、又延いては今後結婚後の幸不幸の基ともなるものでありますから、餘程此の月經中には皆さんが大切になさると云ふことが必要と思ひます。

結婚後の養生法に就きましては、分娩と妊娠と云ふ事に關係しまするが、今日は餘り長くもなりますから、其の方は止めにして、又後時機を得てお話する事に致します。

（以下次號）

叢談

鼻の話

鼻は御存じの通り顏の中央に突出して居りまして、顏の美醜に大切な關係をもつて居るばかりでなく、我々の生活に片時も缺く事の出來ない空氣の入り口であります、我々の呼吸する空氣は此關門を通りまする際に、其の香の有るか無きかによりて混合物の有無を別ち、更に複雜なる通路によりて暖められ、小動物や塵芥は漉し取られて、始めて氣管より肺に入るのであります、自然は實に此複雜なる鼻によりて、我々動物の呼吸作用を保護して居ります。

鼻と他の器官との關係

此複雜なる働きをもつて居る鼻は、上は眼及腦髓と薄い骨を以て相境し、後ろは小さな管を以て耳と通じ、下は又薄い骨板を隔てゝ口と相隣して居ります、其爲めに口、耳、眼、腦等の病氣が鼻の病氣より起る事が少くありません。

人は皆太陽の有り難さを忘れて居る樣に、顏の中央に鎭座して居る鼻が斯程迄に、我々の生命に重要なる關係を有して居る事を知つて居る人は少いだらうと存じます、世には鼻の形が惡るいので鏡臺の前にひそかに涙を拭ふものは少くありますまいが、鼻の

中の病氣に就て左程迄に憂慮する人は少いものであります、其の忘れられて居る鼻に就て御話しするのも何かの役に立つだろうと存じます。

鼻の外形から申しますれば、鼻の形は千種萬態でありまして百人よれば百人皆異なつた形をもつて居ります、或は高く或は低く、或は鼻梁長く下に伸びて鼻口の外方に向へるあり、或は之に反し鼻梁短く鼻口前に向ひ、前方より鼻の中を覗ふ事の出來るもあります、此等の鼻の形を大別して三種類に致します、第一に

直鼻

は鼻梁の眞直な最も素直な鼻でありまして、高さも可なりで且つ鼻口は下に向つて居ります、我國で所謂『鼻筋の通つた鼻』と申しますのは卽ち之れでありまして、東洋でも西洋でも最も美的な鼻とされて居ります、我國古來の繪畫彫刻に見る美人の鼻は皆此種類の鼻で、又古代希臘の彫刻繪畫にも此鼻が賞讚されて居ります、第二の種類の鼻は

凸鼻

と申しまして、鼻梁が前の樣に眞直でありませんで凸字狀に彎曲して居るものであります、此れには其の曲り方によりて種々ありまして、隆鼻、鷲鼻、羅馬形鼻、猶太形鼻等の名があります、隆鼻は卽ち高い鼻でありまして、鼻梁が全體に高いものであります、西洋人の鼻は多く之れに屬して居ります。鷲鼻は兩眼の間の所より急に高くなつて居つて丁度鷲の嘴の樣な形をして居るものであります、此れはよく貴族に多い所から獨逸では貴族鼻とも申して居ります、ロイクス氏は斯樣な鼻をもつて居るものは怒り易く又爭ひ易い性質を有し、銳氣勇氣の相であると曰つて居ります、ナポレオン、シーザー、ビスマーク等の大英雄は皆此種の鼻をもつて居つたといふ事であります。羅馬形鼻と申しますのは鷲鼻に似て居りまして彎曲の度弱いものであります、古羅馬の彫刻其他に屢〻見る鼻の形であります、猶太鼻と申しますのは、同

じ樣に高い鼻ではありますが、鼻尖が鉤狀をなし鼻口が下に向つて居らずに、却て横に向つて居つて、側面より鼻の中を窺く事の出來るものであります、此れは猶太人に特有の鼻でありまして、西洋では大に卑下されて居ります、第三種のは鼻梁が陷凹して居るからして

凹鼻

と稱せらるゝものであります、此れは大部病的のものでありまして、美貌上には最も醜いものとされて居ります、低鼻、平鼻、獅子鼻、鞍鼻等の別があります。

低鼻は名の示す如く鼻は全體に於て低く、其の長さと幅とは大差なく、鼻孔著しく前に向ふものであります、斯かる鼻は往々小兒に見るものであります、其度の甚しきものは狗鼻とも申します。

平鼻といふものは和名の『おたふく』に一致して居りますので鼻の高さは殆どなく、顏面と同じ平面上にありまして、僅かに鼻孔を以て外に向ふものであります、『おかめ』『おたふく』等の假面は其標範であります。

獅子鼻、通俗に所謂『あぐら』をかいた鼻でありまして鼻は低く、短く且つ幅の著しく廣きものであります、鼻孔は大きくて且つ前のと同樣に前に向つて居りまして、前方より鼻腔内を窺ふ事が出來ます、ロイクスは此の種の鼻をもつて居るものは痴鈍であつて、殊に大なるものは粗暴であると申して居ります。

鞍鼻、此れは凹鼻の最著明なるもので鼻梁の中央が陷凹し、鼻頭は低く鼻孔前に向ふものであります、和名『はなかけ』と申しまして、多くは黴毒の爲めに鼻の障子が缺落して起る鼻の形であります、故に黴毒の第三期或は先天黴毒の必用な徴候となりまして我々はかゝる鼻の兒童を見る時は直ぐ其父母の黴毒を想像致します、羅馬のシセロは之れを盜淫の記號と致しました。

鼻の黴毒が更に甚しい時には鼻の障子が破れたばか

りでなく、更に鼻梁にも缺損を生じ、遂に鼻梁の中央に大きな孔を生ずるに至る事は人のよく知る所であります。

（以下次號）

活ける家（承前）

（三三）活ける家の美（上）

チエームス、ファーガッソンと云ふ人は、其著『建築史』の中に左の如く云ひました。『苟も一つの家で、外表に顯出て居るところと、內裏に隱れて居るところとが、正しき比例を以て、落ちも無く造られ人體に於けるが如く、右と左が全く均等調和してゐれば、先づ美しい完全な建築と申してよい。換言て云へば、我々が建築すべき家の絕對的の標準は、人體構造の中に示されて居るものである』と。若し此著者の定義にして正しとすれば、我々の身體は實に建築上に於ける美の標準で、歐羅巴の詩人が『天の星、地の花、人の女は美なる萬象のうち、神の傑作である』と歌ひましたが、獨り女ばかりで無く人は實に美の標準神の傑作と云ふべきであります。

美とは何か

抑も或物が美はしく見ゆると云ふは何が故か、時代の變遷や人種の異同により美の觀念は必ずしも一樣ではありませぬが、古今に通じ、東西に亙つて、萬人に共通である客觀的の美とは、常に一部分の美ではなく、全體の美、各部の調和圓滿であります。近世に於ける美學の鼻祖バウムガルテン氏は爰を說明して『美とは完全圓滿である。完全圓滿は宇宙の極致で、眞、善、美の因て以て來るところ、形式上より云へば多くの部分の調和である』と申しましたが美學の泰斗ハルトマン氏も『個體の體格及び作用が分量上過大若しくは過小であるか、即ち各部の調和が失はれて居れば醜である』と云ひました。ア、誰か調和を失して居る對稱物を目して眞の美と申しませう、それは一部の美（？）、不具の美（？）、醜の美（？）であります。

頭をあげて自然の萬象を見渡すに、凡そ崇きもの、凡そ貴きもの、凡そ高等なる發達を遂げて居るものには、一として美はしき品質が分量上に於ても能く其調和を保つて居らぬものはありませぬ。就中その調和の優秀非凡なのは、我々の身體、余輩の所謂『活ける家』の夫れであります。

或る種の人は實用的の物を目して美であると云ひますが、成る程自然界の萬象中『美はしい』と云はるゝものは、同時に實用的の意味をも含んで居るやうであります。外觀の美しいばかりて實用の全く之に添わぬものは、美と稱するに如何でせう。

我が活ける家の骨は實のところ餘り美はしいものではありません、が、夫れが互に組み合はされて出來上つた骨骼は、如何に堂々たる威儀風格を備へて、外觀も美はしく、又頗る實用的ではありませぬか。西洋の諺にも『猫や鹿は無風流に動くことは出來ぬ』"The cat and deer can not move inelegantly"『舞ひの師匠も格恰の惡い人を甘く歩けるやうに敎へ込まれぬ』"The dancing master can not teach a badly built man to walk well" と申して居りますが、若しも私共の腕の骨が角張つて居りましたら何うでせう、曲り迂つて居りましたら何うでせう、肩の邊に縮まつて居りましたら何うでせう。之を思へば我々の完全に發育した身體は實に美はしい、目的に適つた、實用的のものではありませぬか。

骨の面に附いて居る筋肉……その赤いリボンの樣な肉は、人に自在敏活なる運動をさせると同時に、やがて人の外觀を崇高美麗になすものではありませぬか。幾百條の筋肉が、互に一致協力して、無言のうちに其役目をなしつゝあるは如何に目に美はしく、心に心地よく感ずるではありませぬか。美術家の丹青に成つた彫像も、時としては人體に比すべき外觀の美を有つて居ります、が、之には決して屈曲進退自在なる運動實用の美を備へては居りませぬ。まこと

人體の美

は、其精神の命令と要求とに應じて、自在、活潑、迅速に働らくと云ふ點に於て、更に一段の光明を放つて居ります。而して此自在、活潑、迅速に働くにより各自夫れ〳〵の發達を遂ぐるもので、壯者の外觀は勇氣と活氣とに溢れ、婦人の身體は自づと柔和纖麗を表はし、力士の膂力は荒き獅子をも倒すべく車夫の脚方は猛けき虎にも劣ることなく、少年は輕快敏捷に、老人は沈著冷靜なるなど、職業、年齡、男女別等により各自の特徴の表はるゝは如何に奇しくも美はしきことではありませぬか。然かしながら人體をして更に一層美はしくならしむるものは其

人の性格

であります。エマーソンと云ふ學者は『各人は各自固有の家をつくる』と申しましたが、實際、住んで居る人が其家を建てたものとしましたならば、その家を見て大方その人の性格がわかります。之と同じく其身體を見て、其精神の一端を窺ふこともさまで困難なことではありません、例之ば其人が嬉しいか悲しいか、強いか、弱いか、苦しんで居るか、怒つて居るか、元氣に溢れて居るか、失意の境に沈んで居るかなどがわかります。然り……當らずと雖もさまで遠き間違でもありますまい。殊にかゝる内心を語るものは顏面でありますが、顏面以外の身體も亦た夫れ〳〵の表情をなすものであります。（以下次號）

乳房の話（承前）

乳房の變化

發育に伴ふ乳房の變化や、畸形などのことは、略ぼ前に述べたが、も一つ玆に著しい生理的の變化がある、それは卽ち妊娠に因て起る所の變化であつて、醫者が妊娠を診斷するに方つて、不確徴、半確徴、確徴と云ふて『或は妊娠かも知れぬ』、多分これは『妊娠であらう』、否これある以上は『確かに妊娠である』と判斷すべき種々の徴候がある、この第二の半確徴或は疑徴といふ中に乳房の變化が含まれて

居る。その變化は如何なるものかと云へば、乳房は今迄よりも一層大きくなつて充血し、皮膚の下に靜脈が太くなつて見え、乳嘴も長くなつて、乳暈と共に變色して來る。その色は、西洋人では淡紅色より紅褐色になり、黄色人種では、紅褐色より漸次黑味を帶びて來る。而して乳暈の中にある皮脂腺が所々に黑い麻實大のものに膨れ出す。これを特にモントゴメリー氏腺と稱して居る。それから乳腺も大きくなつて、塊の樣に乳房の內に硬く觸れ、表皮は緊張する爲に、その下の結締織が分れて、白い線が放線狀に出來る、これは妊娠線といふて、多く乳房の下部にあるものである。又妊娠二ケ月にもなれば、乳房を壓して、既に水の樣な初乳が出るのを見る。妊娠すれば以上の如き變化が起るが、然し乳房に斯樣な變化が起つたからと云ふて、必ず妊娠だとは云はれない。何故かと云ふに、乳房の大きくなつて、內にぐり〳〵が出來て、乳嘴及び乳暈に色が著くのは他の病氣に由ても起ることがある、月經痛とか其他生殖器の腫瘍に由ても來る變化であり、又初乳の樣なものは、不妊者でも分泌することがある。倘ほ妊娠線といふものも、名は妊娠線であるけれども、これは單に皮膚が急に緊張して來る爲めに起るのであるから、皮膚の薄弱な婦人が、年頃になつて、急に肥大り始めれば胸、腹、股などの所々に妊娠線と同樣のものを生ずる。それで此等の變化は、妊娠の診斷上に於ては疑徵とされて居るのである。

乳房の疾患

乳房の病氣は、婦人に取ては實に一大事である、それで何ぞ乳房に變狀が起れば、何れの婦人も非常に心配するが、その割合に、乳房に關する智識が普及されて居らぬやうである。乳房の疾患は隨分多いもので、初め僅かのことゝ思つて放置して置いた爲めに、大事に立到り、遂に一命を損した例も決して少なくない。それで心配をするのも無理はない、實際なか〳〵危險なものである、併し乳房の病は、その始から注意して適當の療治をすれば、大概完全に治

癒するものであると云ふことは、特に承知して居つてもらひたいものである。

乳頭の創傷

乳頭や乳暈に創の出來ることは、なか〳〵多いもので、これは其部分の皮膚が菲薄く且つ軟弱いから、僅かの刺戟に依て損傷を蒙り易い、不清潔にして置けば殊に傷が出來易い、又小兒に哺乳せしめる時に小兒が俄かに頭を動かす爲に、乳頭と乳暈の間の所に裂創を起すことが往々ある、乳頭を不潔にして置けば、其處に痂皮のやうなものが固まりついて、小兒が乳を吸ふ時に、その痂皮と一緒に表皮まで剝脫れて、組織に缺損を生じて、其處に小さな潰瘍を作る、これは非常に痛いもので、授乳することが出來なくなる。元來皮膚の軟弱な人は、強く小兒に吸はれるので、益ゝ軟弱になつて裂傷を起す、その傷は大抵縱の方向に放線狀であるが、どうかすると乳頭の首の所が橫に裂けることがある、これは稍ゝ生長した小兒に乳を與へて居る時に、周圍に何か事が起ると、小兒は吸ひ附いたまゝ急に頭を振向ける、その時に起ることが最も多い。又小兒が強く嚙むで、傷を起すことも屢ゝある。これを豫防するには、皮膚の薄弱な人は、妊娠したならば、朝晩一囘づゝ冷水で乳房を洗ひ、又はブランデー、コンニャック、葡萄酒のやうな酒類で拭き、或は沒食子丁幾を一と二の割合に水で薄めたものを塗布して、その皮膚を強健にすることが必要である、又授乳した後には微溫湯或は硼酸水等で淸潔に洗つて置く。乳頭を嚙む時には、直ちに小兒の鼻を撮まむで、その癖のつかぬやうにする。頭を急に振向けることのないやうにするには、授乳する時に周圍を靜にして、小兒の氣を奪はぬやうにしなければならぬ。龜裂を生じた上は、止を得ぬから四五日授乳を廢して、其處を淸潔にして、場合に依ては適當な軟膏をつけ、或は罨法を施す等のことをして、早くなほすやうにしなければならぬ。尙ほ乳頭及び乳暈には不潔の爲に濕疹が出來たり、又黴毒性の小兒に授乳して、黴毒性の潰

瘍を生ずるやうなことがあり、鵞口瘡のある小兒に哺乳せしめて、乳頭に鵞口瘡を發することがある。

乳腺炎

乳腺炎といふ中にも、色々のものがあるが、先づ第一にお話して置かなければならぬのは、化膿性の乳腺炎である。授乳する人には、往々前段に述ぶる如き、小さな傷が、乳頭や乳暈に出來る、これが抑も膿を製へる黴菌の入口なのである。而してこの黴菌が腺の中へ這入つて行くと、間もなく烈しい炎症を起して來る、さうすると、如何なるかと云ふに、通常熱が出る、時としては惡寒がする、而して劇しい疼痛が起つて、其部の皮膚が赤くなつて、熱くなつて、腫脹れて來る、これが内部に膿をもつて來た證據である。これを放置する時には、段々廣がつて、遂には乳房全體が膿の嚢のやうになり、尚ほその後の方へまでも及ぶのである。

この療法は如何するかと云ふに、なるべく早く、その膿の溜つて居る處を開いて、膿汁を出してしまふことである。若し醫者が診察して、これは切開しなければならぬと云ふ時には、決してぐづ〳〵してはならぬ、早速切開してもらふことが極めて必要である。然るに内部で化膿して居つても、一寸外部からは分からぬ、それで最初は切開する必要がなさそうに見えるので、兎角手術を拒む風がある、而して直き皮膚の下に膿が觸れるやうにならなければ、なか〳〵承知せぬ人が多い、然しこれは甚だ誤つたことで、此時には既に膿が廣く行き渡つて居るから、最初ならば、僅かに一ケ所だけ切開すればそれで直ぐ治癒すべきものを、斯樣にしてからは、幾ケ所も切開しなければならず、その治癒かたも非常に長い、そればかりでなく、始の中ならば、再び用をなす乳房も、遂に全く癈物となつて了ふのである。手術すべき時期は、未だ乳房の深い處に膿の出來かゝつた時が適當なのであるのに、なか〳〵醫者の云ふことを承知せずに、墨を塗つて見たり、お呪禁をしたりして、長い間苦しみながら、こんな事にして了ふの

である、眞に恐なことで、苦痛の點から云ふても、時間から云ふても、金を費す點に至つても、此處に大した損得があるのである。それで、何でも乳房が腫れて痛がある時は、素人療治に手間を取らず、醫者に診察を乞ふて、切開が必要だと云ふ時には、躊躇せず切開して、手取早く治癒して了ふことが大切である、故に玆には自分で行ふべき治癒法は略すことにする。

以上は、産後三四週間の内に最も多く起るもので、産褥性乳腺炎などゝ云はれて居るものに就て述べたのであるが、初生兒乳腺炎と云ふものもある。此れは初生兒の乳房の部分が赤く腫れて、これを壓して見ると、水のやうなもの、又は乳の如きものが出るのである、その他成年性乳腺炎と云ふて、十四五歳になつて、乳房が腫れて痛むことがある。これは大抵二三週間で、其處に色を殘して消散してしまふものであるが、時としては段々進んで、腋窩の淋巴腺なども腫脹し、稀には化膿するやうなこともある。併し普通は最初に鉛糖水とか、醋酸礬土水などで罨法すれば、此等のものは早く治癒つてしまふものである。

（以下次號）

生活上改良すべき點（承前）

勞働者であれば、身體の勞働が、あまり劇しいこと、食養生が不十分であること、酒類を無暗に澤山用ふることで以て、身體を惡くするのであります、大體勞働者と申すものは、大變粗食をしてゐまして、身體の力は食物ではなくて、酒から出るものと考へてゐますから、强い酒類を飮みまして、寒いときは身體を溫め、一寸一時の元氣を起させるとであります、この考は甚だ間違つてゐるのでありますが、下流の勞働者は皆、さう信じてゐます、勞働者ばかりではなく、中流以上の方でも、こんな考を抱てゐなさる方は隨分あるやうに見えます、主人が少し疲れて、歸宅致しますと、主婦は、今日は少しお疲れの

やうですから、お酒を一本増しましやうかなどと申されることは、度々耳にすることでありますが、これは大變な間違であります、世の中では酒の毒と申しまして、随分鬧しく騒ぎ立てますが、酒はどう云ふ譯で毒になるかと云ふことは、餘り知れてはゐないで、只酒を飲むと酔つて、いろんな悪いことをしたりするから、酒を飲んではいけないと申す方もあれば、また酒を飲むと頭痛がして、胸が苦しくなるから、吃度身體に悪いものだろふ、だから飲まない方が好いのだろふ位のお考へで以て平氣でゐる人がありますが、これは半分知つてゐるために、大變危険であります、酒の作用は、人を興奮させるものであつて、なんでも酒さへ飲めば元氣が出ると云ふ人がありますが、これは全く反對であつて、酒は決して人を興奮させて、元氣を出させると云ふ作用のあるものではありません。

藥物學上で酒の作用と申す、條下を調べて見ますと酒は麻醉劑の内に入れてあります、麻醉劑と申すものは、皆様の御承知のやうに、決して人を興奮させる作用は持たないものであります、併しよく人の云ふやう一杯元氣を出して遣れと云ふことは、實際あることであります、それならなぜ一杯元氣と云ふものが出るのかと申しますと、これは一寸説明を致さねば判り苦いことであります。

酒は麻醉劑でありまして、これを飲みますと、先づ神經の作用が麻痺して參ります、そして神經の作用と申しましても、種々澤山あります、手を働かす神經もあれば、足を運ぶ神經もあり、口を動かせる神經もあります、それからモー一つ、これ等の運動を起させる神經を抑へてゐて、餘り劇しい運動を起させないやうにする神經があります、この神經は甚だ大切な神經でありまして、若し何か腹の立つことがあつて、この人を撲つてやろふと思ひましても、その時にア、可憐だと云ふ考へが起つて、撲つ所を撲たずに、口で小言を云つて、それでその場を我慢すると云ふのは、全くこの神經があつて、働いてゐる

のであります、また人の心臓は始終あの通り、規則正しく脈搏を打つてゐますが、今若し心臓と脳とを結び付けてゐる神經を切つて了いますと、心臓の脈搏は、大變數が增へて、不規則になります、これは全く心臓の脈搏を無暗に澤山にしないやうに、心臓の運動を抑へてゐる神經が切られたから、こんな結果になるのであります、その他の手、足、胴の運動や、精神の作用なども、皆この神經で抑へられて、亂暴な働きをしないやうになつてゐるのであります、このやうにこの神經は、色々の神經の作用を抑へてゐるものでありますから、これを抑制神經と申します、ところで酒と云ふものは先づ第一番に、この抑制神經を襲つて、これを痲痺させて、モーこの神經が作用くことのできないやうにするのであります、そうすると身體中のすべての運動は、抑へられることがないものでありますから、十分に働くやうになつて、心臓の鼓動は早くなつてくる、耳では何んだか、始終音が聽へるやうに思はれる、手や足は何か爲たくなる、默つてゐられなくなつて、大きな聲を出して歌を謳つて見たくなる、終りには居ても立ても居られなくなつて、座敷の眞中で踊り出すと云ふ風になるのであります、抑制神經が痲痺したのであります、これを人が知らないで、何んでも酒を飲むと、大變元氣が出てくると考へて、一杯機嫌と云ふ名を付けたのであります、それから次は種々の運動を起させる神經が痲痺してくるのでありますから、そうなると手や足はきかなくなつて、眼は開いてゐるけれどもよく見えない、口をきけば、舌が廻らないで、『へべれけ』と申す醜態を演ずるのであります、斯ふなると身體は大變な害を受けるのでありまして、それが全く恢復すると云ふことは一寸困難であります、その内にまた酒を飲むと前と同じやうな有様になつて、前の害が十分恢復しない内にまた害を受けるのであります、斯ふ云ふ風に、度々害を受けてゐる内に、とう／＼慢性アルコール中毒と申す怖い病氣に罹つて了い、酒を飲ますには一日も

生活が出來ないと云ふ人間になるのであります、煙草を喫む人は、煙草がなくては一日も暮せないと申しますが、これは慢性の煙草中毒に罹つてゐるのであります。

斯ふなると、モーその人はだめでありまして、身體の内には始終毒がありますから、早く身體が惡くなつて、了ふのであります。

酒を飲む人は、一寸見ると顏の色は良くて、肥滿てゐますから、健康のやうでありますけれども、肥滿てゐるのは、本當ではなく、脂肪が溜つたのでありますから、心臟にも脂肪が溜つてゐて、心臟破裂、心臟痲痺と云ふやうな病氣になりやすく、また血管が硬くなつて、脆くなつて、すぐ破れる性質を持つて居て、腦の血管が破れて、俗に中風と申す病氣を起します。

女の勞働者の方では、酒を飲むと云ふことはありませんが、外の女に比べますと、餘程早く年を取つて老耄て了ふものであります、殊に下等社會の女は三十位になるとも一五十位に見えます、これはなぜかと申しますと、女は男よりも、勞働に適してゐないで、勞働するために身體に害を受けることが男よりも劇いのであります、それからまた、女は自然男よりも粗食するものでありますから、從て身體も惡るくなるのであります。

勞働者は國の財寶であるのに、今申し上げたやうな悲境に陷つてゐるものであります、世界で一番の金滿國と申す米國は、勞働者で立つて行く國であることを見ても、國の富と勞働者と云ふものが、どんな深い關係を持つてゐるものであるかと云ふことが判ります、それで國の富を增進させて、日本を世界の舞臺に立たせて、富國强兵の實を擧げやうとするには、どうしても先づ日本の勞働者をこの悲境から救い出して、十分の保護を與へてやらねばなりません、年々徵兵適齡の男子が、田舍から出て來るのを見ましても、勞働者はつまり兵士となるのでありますから、枝葉の兵士教育だけに力を入れて、その根

本の勞働者を愛護してやることを致さなければ、少しも本當のことは出來ません、それには先づ勞働者の教育程度を高めて、莫迦氣た考を抱たないやうにして、日常の生活をするのにも、少しは自分の身體の養生と云ふことを考へるやうにしてやりたいものであります。

腦力を使ふ職務を執つてゐる人は、勞働者とは餘程關係が違つてゐるのでありますが、國が文明に進むに從つて、この種類の人は、益々必要となつてくるものであります、その生活の有樣を考へて見れば、餘程偏頗であつて、腦ばかりを使つて、身體の運動と云ふものは、少しも行はれてゐないのであります、食事を取ることでも、大變不規則であつて、朝早く朝餐を行つてから、夜遲くまで、何も食べないで、始終神經を使つてゐて、神經は常に興奮せられてゐるので、食事の度數が少ないため、一度の食事に、澤山食べて、そして身體の運動が不十分であるために、その澤山の食物は消化せられないで、胃腸の内に溜つてゐて、さう〱胃腸の病氣を起して參ります、この樣な風にして生活してゐる人等は、酒は飲まないにしても、運動の不足と云ふことでもう非常に身體を傷けるものでありますが、得て斯ふ云ふ人は酒が好で、お役所が濟んで歸宅すれば必ず酒を飲むと云ふ習慣を作つてゐます、この習慣があると云ふことは、その人に取つては、時として良いことがあります、なぜかと申しますと、お役所の用事が少し面倒なときは、これを濟ませば早く歸宅して……と思ふと、大變元氣が出て、早く用事が片付くと云ふことであります、誠にお役所の爲には結構なことでありますけれども、一利一害はどうしても免かれないものか、その本人の爲には大變惡いことで知らず〱の内に身體はアルコールで浸たされて、遂に救ふことの出來ないアルコール中毒と云ふものを起すのであります。私が今まで申したことで考へて見れば、腦を使ふ人には、十分に身體の運動をさせて、食事は規則正しく、ゆつくりさせて、酒を

澤山飲ませないやうにすれば、先づ身體を危險から救い出すことが出來るのであります、身體の運動と云ふことは、時間の問題と關係してゐることでありますから、餘程困難なことであります、お役所の往復は、遠ければ自轉車にするか、近ければ必ず步く雨が降つても風が吹いても必ず步くと云ふことにすれば、十分に運動することが出來ます、お役所の內でも少し氣を付ければ割に身體を動かすことのあるもので、日本のお役所ではどこのお役所でも贅員と云ふものがあつて、そこの長と云ふ役になれば、自分は一寸も動かないで何事でも出來るやうにしてあります贅員淘汰と申すことは、目下着々實施せられて、近い內にはお拂拂ひの無用人は居なくなるであろふと思はれますが、そうなれば大抵のことは、自分で用を足さなければならぬやうになつて、身體の運動も十分になつて參ります、獨逸などではお役所の役員と云ふものは、大變儉約してあつて、餘程大きな役所に行つて見ても、給仕と云ふものは置いてないので、何んでも自分でするやうになつてゐます、一寸郵便を出すと云ふときには、日本のお役所であれば、給仕に命ずるのでありますけれども、獨逸では自分で行かねばなりません、斯ふ云ふことになるとお役所の用事が遲れるやうに思われますけれども、實際はその反對で、無駄な談話をすることがありませんから、却て用事は早く出來上るのであります。兎に角自分から氣を付けて、なるべく身體を動かせやうと心掛けてゐなければなりません。

食事の不規則と云ふことは、これは餘程考へねばならぬことであります。日本では正午が、必ず晝食を取るべき時刻となつて居ますから、晝食は大抵規則正しく行はれてゐるやうに思ひますけれども、朝食と夕食とは大變不規則で、殆ど百人が百人とも違ふやうに思ひます、これはすべての生活法やその人の習慣と關係することでありますから、それ等を考へ合せて、一定したいものと思ひます、一概に申すことは出來ませんけれども、朝は起牀後一時間位にし

て、夕は夏ならば七時まで、冬ならば五時頃までに食事をするのが良いと思ひます、これは消化の關係から割り出した時刻でありますから、一寸說明を致して措きますが、胃の中に這入り込んだ食物は、胃の運動と、胃の中で分泌される消化液との爲に、段段變化して、丁度牛乳のやうなものになつて、少し宛腸の方に送り出されるのであります、そして普通の食事であれば六時間から七時間までの間に、胃の中の食物は皆腸の方に送り出されて了ふのでありますから、今申した時間に食事を取れば、その時は胃は空になつてゐる時分でありますから、胃を疲れさせることはなく、消化は盛に行はれるのであります。

酒を濫用しないと云ふことは、これはその人々の克己心に訴へねばならんことであります、世の中には『酒なくてなんの己が櫻哉』などと云つて、何に付け彼に付け酒を引き合ひ出してゐる人がありますが、これは一は克己心が足りないのでありますが、復た慢性アルコール中毒のために斯ふ云ふ風になる人もあります。

今ここに申し上げた有様は、すべてのお役人に共通の弊害でありますが、これ以外にお役所そのものが大變惡いものがあります、これは止むを得ないことでありますが、出來ることなら改良致したいと思ひます、一例を申せば、議會の開設中印刷局官報部のお役人は、誠にお氣の毒な次第であります．五十歲以上のお役人が二三ケ月も打連けて徹夜をしたらどんなに身體に障ることでありませうか。

軍人の生活法につきましては、これは餘程面白いことで、大變議論のあることであるさうです、私等は全く門外漢で、軍人の生活法の眞想を知ることが出來ませんが、その方面の方から聽いて見ますと、行軍とか演習とか云ふ場合の兵卒の生活狀態は、到底門外漢の想像のできない程であると云ふことであります、只斯ふ云ふことだけ聞いたのでは、それは良いのか惡るいのか一向判斷がつきませんから、只今

此處では軍人の生活法については何も申し上げることは出來ません。（以下次號）

不妊症及其の治療（承前）

無月經、これは生理的には破瓜期（日本人は凡十三四歳）以前、妊娠中及乳兒を養ふ間、及月經閉止期（四十五歳乃至五十歳以上）中に見るものであります、此等の期間は卵が成熟する事がないのでありますから從つて妊娠する事が出來ません、勿論產後未だ一度も月經が來潮せぬうちに、妊娠する事もありますが、此れは極めて稀なものであります。亦未だ一度も月經のない少女の妊娠する事があります、是れは第一の月經があらはれる時期に受胎したものでありますから、何も不思議ではありません。

病的に無月經の原因となるものは、又種々あります、卵巢子宮等が生れつき缺けて居るもの、子宮口以下の陰部の閉塞或は狹くなれるものが主であります、又甚しき恐怖、驚愕、悲哀其他の神經興奮も無月經の原因をなす事があります、精神病患者にも月經がなくなるのが普通であります、身體の甚しく衰弱した人例へば高度の貧血、肺結核、生殖器結核、糖尿病、心臟病等の大病には多く月經は閉止致します、又之に反して身體の過度に肥滿した脂肪の多い人にも月經閉止が參ります。

斯く原因は種々ありますが、其の不妊症を來すは何れも同じ事で、原因の如何を問ひませぬ、そして同じく無月經、不妊でありながら、斯樣に色々の時に起るものでありますから、月經閉止したからといつて、漫りに通經劑として、藥店にある素性も知られぬ賣藥を飲用するは、效がないばかりでなく、却て健康を害する基ともなります、かゝる際には相應の醫師の診察を受けて、其原因をきはめ、原因に應じて治療を受けねばなりませぬ。

月經は又心の影響を受けて、異常を呈する事があります、甚だ妊娠を熱望して居りました人に數ケ月間

月經が閉止する事があります、妊娠した事と思つて悦んで居るも、何ヶ月經ても、腹部が少しも大きくならないので不思議になり、産婆或は醫者に見て貰つて始めて妊娠でない事がわかり、醫者の唯一言で其翌月より月經が再び來潮した例があります。

又ヒステリー患者には妄想妊娠と申しまして、自分は確かに妊娠したと確信し、月經も閉止し、腹部も漸次大きくなりまして、外より見れば他人も亦妊娠と信じて疑はない樣になります、そして多くは他の精神症狀がある爲め、醫師に發見されますが、時としては、ヒステリー症狀も甚しくなかつた爲め家族も産婆も醫者も氣づかずに、眞の妊娠と思つて居て、臨月になつて産が起らぬのみか、十一ヶ月になつても十二ヶ月になつても産がないので始めて氣がつく事もあります。甚しいのになると臨月になつて激しい陣痛が起つて苦しむものもあります、勿論妄想妊娠でありますから、如何程苦しんでも産のありやう筈がありません、産婆或は醫師が此時始めて氣がつく事もあります。

之に反して妊娠を恐るゝ事甚しきあまり、無月經となり妊娠の徴候を生ずるものがあります、此は神經質の婦人が不義などなせる時に起るものであります。

此等のものは何れも精神的のものでありますから、患者の最も信用せる醫者より妊娠でない事を懇々と云ひきかせらるゝ時は、多くは妄想がなくなるものであります。

月經は全く閉止いたしませんが、通常より少い事があります、之れも多少健康を害した結果でありまして、前者と同じ樣に不妊症の原因となる事があります、而して月經過少を起す病氣は多くは全身の貧血衰弱等でありまして、此等の者自身が既に卵子の發育を妨げるのであります、假令卵子は成熟して卵巢から出たとしても、其は他の健康な人の卵子よりは發育が不完全で、且つ脆弱なのであります。

之に反して月經の多い病症は種々の病氣に來るので

あります、先づ全身病としては、心臟病、腎臟病、過度の肥滿、高度の貧血等が原因となります、又血友病と申します病氣にては出血が長く續いて止まらぬものもあります、其他には天然痘、腸窒扶斯、虎列拉等の傳染病も其原因をなします。

局所的疾患と致しましては殆どあらゆる子宮病は月經過多症を起すのであります、子宮内膜炎、外膜炎、子宮後傾、後屈、前傾、前屈其他の位置の異常は皆月經過多症の原因となり、且つ不妊の原因となります、又子宮筋腫も前に申しました通り月經過多症を起し不妊の原因をなします、子宮癌、子宮肉腫等にも月經過剩を起しますが、之等には妊娠する事が少くありません。

喇叭管の疾患、卵巢の病氣及子宮周圍の諸器官の病氣にも月經過多症を起す事があります。

月經過多症と一言に申しますが此には種類を分ちます、一は一回の總量が多いものでありまして、從つて多くは一週間以上十日間も出血が續き、爲めに毎月一回づゝ甚しき貧血に陷るものであります、他の一は一回の分量は左程多くはありませんが、其月に二回とか或は三回とかいふ樣に回數の多くなるものであります、此の時には二回ある樣な場合には何も病氣がない事があります、此は兩側の卵巢が各一ケ月に一つの成熟した卵を生ずる爲めで、即ち一ケ月に二個の卵が成熟する爲めであります。

月經過多の原因も以上申しました通り、一樣でありません、又別に病氣でなく不規則或は手淫、局部の不潔等の爲めに月經過多を生ずる事もあります、そして、月經過多は必ずしも、妊娠を妨碍するものではありません、月經が多くて困る人でも妊娠する事があります、之れは原因の異なるに因つて、各々異なつた結果を來すのであります。

第四位に來る月經異常は月經痛であります、即ち月經時或は其前後に下腹の痛みを訴へるものであります、全然健全な人には多少の不快感、下腹の重い樣な、引かるゝ樣な感じはありますが、甚しき痛を訴

ふるものは少いものであります、併し時としては健康な人でも可なりはげしき痛を訴ふ人もありますが其は極めて少いものであります。

此月經痛の原因は月經過多の原因をなす諸病と略同じでありまして、婦人は痛みの爲め食事も廢し、顔色蒼白となり、頭痛、惡寒等を起し非常に苦しむもので、其れが或は一日位で止む人もありますし、又數日間續くものもあります、子宮筋腫、内膜炎等には、止む時なく痛むものもあります。

此際其痛みが果して病的のものであるか、或は特別の病氣でないものか、之は專門家でなければ定むる事が出來ません、そして月經痛は健康な人にも起り得るものでありますから、此が常に不妊の原因となるともいふ事は出來ません、月經痛で苦しんで居る人でも、數人の子を生む事はあまり少い事ではありません。

以上の月經異常の外に月經不整といふ事もあります、即ち或る月は閉止し、或る月には二三回もありある時は少くも二三日にて濟み、或る時は一週間以上もかかる等の事があります、此等も或る時は不妊の原因となる事もありますが、或る時は差支なく懷妊する事も出來ます、之れは病氣の如何によりますもので、月經不整其物は其の病氣の一徴候に過ぎないのであります。

要するに總て月經異常は必ずしも不妊の原因となるものでありませんが、併し多くは妊娠の妨害となるものであります、殊に無月經に妊娠する事は異例といふ可きものであります。

不妊症の原因に關しての醫學者の知識は此迄申しました通り、未だ極めて不完全でありますから、其療法は醫術の最も困難なるものゝ一つであります、假令其原因が何所にあるか發見し得た時ですらも、如何にせば其の夫婦をして子供を設けさす事が出來るかといふ問題は、實に難中の難事でありまして、極めて僅かなる場合の外は、神ならぬ人の望む可からざる事であります、原因のわかつた者でさへ難いの

でありますから、原因の不明なる不妊症に至りては如何なる名醫も全く手を下す事が出來ないのであります。

然るに實際に於て醫者が不妊を患へて居る夫婦を診察して、其原因を發見する事は極めて困難なのであります、以上に述べました通り不妊の原因となる可き病氣は澤山ありまして、又一人の婦人を診察して其不妊の原因と見なさるゝ生殖器病を尋ねますれば多くは一二に止まらぬのでありますから、其の何れか眞の不妊の原因であるかと斷定するのは困難であります、從つて其の何れを療治したならば、妊娠する事が出來るかを推察する事が出來ないのであります、時としては不妊の主因であると思はるゝ病氣を治療しても、妊娠する事が出來ないで、數ケ月或は數年の後、始めて其の原因の思ひがけぬ小さな所にある事が見出さるゝ事があります。

殊に其原因が實は夫にあつた場合には、始めに夫婦兩人を詳細に診察しないで、唯婦人のみを見て其治療を施す如き時には百の治療も效なきは言を俟たぬのであります、故に婦人の病を十分に治療して、月經其他に何等の變常もなくして妊娠する事が出來なかつたならば、此時には十分詳細に夫の身體を診察し、其の精液を檢査する事が必用であります。

斯くしてそれ〴〵の原因が明確になつたならば、其れに應じて原病の治療をせねばなりません、それで猶效かなかつたならば、更に精密に男女兩方を診察し、一定時間內觀察して、其障碍が何れの方にあるかを決定する必用があります、斯樣にしても猶原因と認む可きものがなければ、唯全身の榮養狀態に注意し、衞生を守り、殊に生殖器の衞生に注意を怠る事のないやうにする外はありません。

若し又あまり肥えた人で子なきを患へ、月經も少いか或は全く閉止した時には、一方には食物を少くし澱粉質に富んで居る食物例へば芋類を廢し、且つ脂肪を減少せしむる種々の療法を施し、一方には局所の刺戟によりて通經せしむる事が肝要であります。

美容法（承前）

第三、ソバカス、イボ及アザ

顔面の美を損するものは幾らもありますが、普通のもので最もよく知られて居るのは、前に申上げた面皰とソバカスでありませう。同じソバカスでも蕎麥の種に異ふものがある。卽ち通常ソバカスと申すものゝ中には或種類の母斑、雀卵斑、夏日斑、黄斑などゝ云ふものが含まれて居るのであります、併し大抵夏日斑のことでありまして、これは髮の毛の赤い色の白い人に多いやうである、而して通常六乃至八歳の頃から出來るもので、遺傳の關係もある、これは春から夏に至つて、最も著るしく顯はれ、冬になれば色が褪めて來る、而して夏になれば再び著明になる、こゝからして夏日斑と云ふ名が來たのであります。太陽の光線の影響に由て能く著はれることは確であるが、併しこの夏日斑は日光の爲に起るものではありません。

雀卵斑或は雀斑と云ふものも能くこれに似たもので、矢張黑色乃至帶黄褐色の小さな斑で、丁度雀の卵の斑點に似て居るのであります、これは何處にでも出來ますが、殊に顔面に著るしいのであります、これは先天性のものではないが、併し矢張その發生し易い傾は先天性と云はなければならぬ。

母斑は、これは全く一部分に色素の增加した先天性の變化でありまして、平滑なものもあれば、疣のやうなのもあり、又神經の分布區域に相當して澤山出來て居るのもある。

黄斑、これは妊娠或は子宮病に罹つて居る人に多く發生するもので、又日光に曝されて起ることもあり、カンタリス、カラシ、ヨード、クリサロビンなどの藥劑に依て起ることもあります、又器械的の刺戟に依ても生ずることがある。

以上數種のものは、何れも似寄つたもので、皆所謂ソバカスの部類に這入つて居るものであります。

ソバカスも美人の中に數へられるさうですから、少

し位ならば苦にすることもありますまい、又醫學上から申しましても別に恐るゝに足らない、患者がその醜さを忍べば足ると云ふのですが、只時として內臟の黑色素性の腫瘍を伴ふことがあり、又これからして癌腫の如き惡性の腫瘍を發することもあるのであります、又澤山顏面に褐色の斑點が出來て居つては、確かに美貌を損するのでありますから、美容法に於てはこれを論じなければならぬ。

黃斑は、妊娠に依て起つたものは、大概產後には脫色して自然に治癒つて了ふ、又子宮病のあるものはそれが治癒れば黃斑も同時に無くなることがあります、凡てその原因があれば、これを除くことが第一であるが、直接これらの色素斑を除くのには二三の方法があります、但し何れも腐蝕藥を用ひるのですから、自分で用ひらるゝことは危險でもあり、又澤山に出來て居るものには施す譯に參りませんから、その治療法は玆に遠慮したいのですが、兎に角斯樣な治療法があると云ふことだけを申上て置きます。

藥劑では石炭酸、昇汞、三格魯爾醋酸などが用ひられまして、石炭酸溶液の濃厚なものを斑點に附けると其處が腐蝕されて白色の痂皮が出來る、而して一週程たてば、その痂皮が剝落ちて、別に瘢痕を貽さずに治癒つて了ふのであります、併し前にもお斷をして置いた通り、斯樣な劇しい藥を幾ケ所も塗布したならば、其害は實に恐るべきもので、美容法どころではない、反て醜容法を施す譯になるのですから、先づ〳〵自分ではせぬ方が安全です。

これと同樣に昇汞を用ひる、即ち一％溶液を度々塗布し、或は一％の酒精昇汞液に少量の石鹼と二三滴のグリセリンを加へて、その沈澱を塗布するこれは晩につけて、翌朝になつてから酒精で洗ひ落すのである。も少し短時日間に取つてしまはうとすれば一％の昇汞水を、その母斑に相當する大さの布に浸して、母斑の上に附けて置けば、四時間程で其の部分の皮膚が熱くなつて緊張するやうに感じ、やがて表皮が膨れ上つて水胞の下の

方を針で刺して、液を漏して、其處に粉藥を撒いて置けば、八日の後には痂皮が落ちて同時に色素も無くなることがある、併し此等の方法で一時色素が取れてしまつても、二三ヶ月の後に復び色素が留つて斑を生ずることがあつて、反復して同法を行はなければならぬことが往々である。

右の二法は、どちらも劇しい方法であつて、只一つ二つの母斑を取る時に用ゆる位のものであるが、長い間用ひても差支ない方法は、五乃至二〇%の白降汞と次硝酸蒼鉛を含むで居るクリームであります、これならば、毎晩一回宛ソバカスに塗つても良いのであります。

尙ほ著るしい色素斑、肝斑卽ち妊娠斑、又小さな母斑、或は剳刺などを除くには、電氣分解法が最も良いのであります。

この夏日斑を始め、その他のソバカスの如きものを內服藥で以て治癒すことが出來るかと云ふに、多少效能のある場合もありますが、先づ疑はしい方であります。

疣贅も屢ゝ顏面に生ずるものでありまして、これには傳染性のものもあります。それで餘り多くない場合には、皆一緒に取てしまう方が良いと申します。

これには電氣分解法は餘り用ひません、やはり硝酸の如き劇しい腐蝕藥を用ひ、その後を銳匙といふもので搔取つて、又格魯兒鐵などで腐蝕する、さうすれば大概一度で出なくなりますが、單に腐蝕藥だけでも、何回も用ゆれば治し得るものであります。砒素劑の內服に依て治癒するものもあり、又素人療治にも種々樣々なるものがある、佛蘭西などでは感應術で以て疣を治すと云ふものさへある、併し疣贅は實際自然に治つてしまうこともあるのであります。

兎に角砒素劑は、若い人の顏面に出來る扁平な疣贅には、良くきくやうであります、併し最も簡便なのはX光線でありまして、これは多數の疣贅その他類似のものにも效があると申されて居ります。

雞眼、胼胝の如きものは、その原因を除くことが第

一であるが、尙ほ加里滷汁で軟かにして、削つて段段小さくし或は一種の器械を以て掘出しますけれども、これを持續的になほしてしまふことは容易に出來難いのであります。

胼胝や、雞眼はよいが、速かに治ほす必要のあるのは、捻つたり、挫いたり、打たりして、皮下に血液が出て、赤く或は靑くなつた所謂アザでありませう、婦人の顏面などにこれが出來ては、必ず人の目を引く譯であります。尤もこれは放置して置けば、大概自然に治ほりますけれども、只なるべく早く治ほす工夫を致さなければなりません、と申した所で別段大した事も要りませんが、直ぐならば冷やした方が善いけれども稍〻時間がたつて既に紫色になつたものならば、アルニカ丁幾を二倍に薄めた微溫湯で罨法を施し、そのガーゼが乾かぬやうに頻回これに浸してあてゝ置く、而して夜は三％のサリチル酸軟膏を塗つて粉を撒布すれば早く引きます。

（以下次號）

育兒

小兒急癇

俗に『ヒキッケル』即ち小兒が急に人事不省に陷りて眼球を吊上げてしまふことは隨分屢〻あることで、お母さんまでも驚いて蒼くなり、或は倒れるやうなことがある。これには癲癇又はカタレプシー、その他種々の官能的神經病が含まれて居りませうが、茲には主として小兒急癇或は搐搦症と云ふものに就いてお話を致さうと思ひます。何れの官能的神經病で起る人事不省も其症狀は善く似て居りますから、此の小兒急癇で以て凡てのヒキッケを說明することゝ致します。

一體小兒急癇と云ふのは如何なるものかと申しますれば、丁度彼の癲癇のやうな風に、病氣に罹つて居

る小兒或は今迄全く健康で遊んで居つた小兒が、突然眼を据えてしまつてからに、瞬目もせず、眼球は上の方に引上げられ或は側方に廻轉して白眼を出し氣を失つてしまふのであります。而して顔面の筋肉は引搐られて、口角の處も牽かれるから恰かも微笑して居るかと思はれるやうなことがある。又齒を喰いしばることもあり或は齒軋をしたり又は物を咀嚼やうな運動をすることがあります、これは舌筋、咬筋又頰筋などの口の筋肉が痙攣を起すからでありまして、口から唾液の泡沫を出すことが多い。この顔面筋が痙攣を起して居る時に、手脚は強直しますけれども、其間に時々小痙攣を交へ、痙攣は漸次全身に及びまして、背筋の痙攣を起すと思へば今度は手足が顫へて拘攣る。それから呼吸を助ける呼吸筋も拘攣ますから、その爲に呼吸が止むでしまひ、聲門痙攣の爲に顔色が紫色になつて時としては此れが爲に歸らぬ人となつて了ふこともあります。此時に大便や小水を漏らすことが間々あります。斯樣になつて居る間、卽ち發作の持續は數秒乃至數分間で、それからヒキツケも緩むで參りますが、尙ほ多少昏睡狀態になつて居りまして、目を醒さずに深く眠り込むものであります。尤もこれには重い輕いがありまして、輕いものでは、暫時眼を白黑させ、又は眼を半開して異樣な顔貌をするとか、呼吸が急しくなつて來て僅かに手足を顫はす位のことで、直ちに常態に復し、その後は暫時食が進まぬといふ程のことでありますが、一回ヒキツケルと外觀上全く健康に見えて居りましても、その後度々反復して起す傾があるものであります。

元來腦髓の一番大切な皮質の中には、反射抑制中樞と申しまして、身體の各部より傳へられる諸種の刺戟に對して、そのピンと來るやつを一つ、どつこいと抑へつける働をする處があるのですが、小兒の腦では、まだその發育が十分でない、それに又一方では、知覺神經の反射興奮性が盛である、卽ち痛いとか痒いとか云ふことに感ずることが大人よりも餘程

烈しいのですから、少しひどく恐れるとか、驚くとか又烈しく泣き叫けんだり、久しく日に頭を曝されたりした後にもヒキツケルことがある。又咽頭加答兒、胃腸加答兒、肛門の病氣等、凡て口より肛門に至るまでの病氣卽ち消化器の病氣が、その原因となること多く、消化不良、殊に蛔蟲などが寄生して居れば屢々ヒキツケル、併し昔の人のいふやうに、何でもかでも蟲の性と云ふものでは決してないのであります。小兒が少し強く泣けば、直ちに蟲のせいである、熱が昇れば蟲のせいである、お腹が痛めば無論蟲のせい、況やヒキツケルに至ては疑もなく蟲の爲であると獨りぎめに診斷を下して賣藥の蟲下し或は御符を頂かせるとか、又はサントニンは善いが勝手な分量で用ひたりする。これは田舍のお婆さんのみかと思へば、都の眞中に住む、しかも相當の敎育もありさうな奧樣までが、斯樣な迷信を懷き、斯樣な無法なことを遊ばさるのを實際屢々見て、慨かはしく思ふことがあります。なる程小兒の腸の内に蛔蟲が居れば、色々の仇をする、これが爲に往々醫師も診斷を誤るやうなこともないではないが、併しこれは顯微鏡で大便を檢査すれば直ぐ分かることで驅蟲劑を用ひるには、必ず前以て蟲の卵の有無を顯微鏡で檢査した上でなければならぬ、且つサントニンは今日では民間でも往々濫用することがある樣子ですが、これは危險な藥品で、決して妄に用ゆべきものではありません。却て此の驅蟲劑の中毒もヒキツケの一原因に數へられて居りますから、稍々横途に這入つたやうですが序にお話致して置くのであります。此の他ヒキツケの原因となるものは、酒類、痲醉藥、病氣では肺炎、急性の發疹、間歇熱等であつて、佝僂病の小兒、消化困難乃至胃腸症で熱のあるものはに最も屢々ヒキツケが來る、神經病の遺傳あるもの、又腦に病氣があれば無論よくヒキツケルのであります。年齡は二三年の小兒に多く、五歳以上になれば比較的稀である、兎に角、身體の孱弱な貧血した、神經質の小兒に多いのであります、世俗

で癇が強い、蟲が強いなど云ふのは此種の小兒を申すのであります。

小兒が急癇を起した場合には、如何すれば善いかと云ふに、先づ第一に衣服を緩めてやらなければならぬ、それから顔が蒼白ければ枕を除いて頭の方を低くしてやり、紫色がゝつて來たならば、これは窒息しかけて居るのであるから舌を引出してやることが最も大事である、而して窓を開ける。顔に冷水を吹きかけ、頭部に氷嚢をあてる、又芥子を揑つて紙に附けて、胸又は脚に貼りつける、その間に急いで醫師を召けば、醫師の來る迄に醒覺することもあり、尙ほ醫師が診察して始めてそのヒキツケの原因を調べ、これを取除き、それ〴〵適當の療法を講じなければならぬのであります。

救急の處置を施す時には、隨分あわてゝ居ますからなか〳〵今申述べただけの簡單な方法でさへも、うまく行かないのですが、尙ほ鼻や耳の孔を檢査して見ることが必要である。其處に病氣があれば無論のことでありますが、單に何か異物が這入つただけでも、その刺戟に依てヒキツケルことがある、實際足蹠又は趾の間に物が這入つた爲にヒキツケ、それを發見して取除くと同時に輕快するやうなことがあるからであります。も一つ注文するならば、體溫を計ることである。これは醫師が來れば必ず行ふことであるが、その熱の爲に起つた痙攣であるか、又は熱なしに起つたものかと云ふことが頗る大切なことで熱のある方では、肺炎、痘瘡、猩紅熱、麻剌里亞などの急性傳染病、或は尿毒症の初期、殊に傳染性腸疾患などではないかと云ふ方に診察の眼が向ひ、熱がなければ先づ佝僂病、中毒、消化困難の爲に食物が腸內で腐敗して自家中毒を起したのではなからうか、或は腸の寄生蟲であらうかと云ふやうなことの鑑別をつけるのであります。

小兒急癇を起して、自然に醒覺し或は以上の諸々の救急法に依り、又醫師の處置に由て一旦醒覺した後これが直ぐ何でもなく健康に復するか、どうかと云

ふことに就ては、その原因に由ることで、尿毒症とか急性傳染病などに由つて起つたものであれば、其の豫後不良で先づ〳〵六ヶ敷いものと思はなければならぬ。肺炎や佝僂病に罹つて居る間に起つたのなれば大概、その爲に死で了ふことはないが、併し重ねてヒキツケるので、遂にはその發作の爲に斃れることもあると云ふことを覺悟して居らねばなりません。

小兒取扱法の誤り

此篇は前號『小兒身體の發育』として、掲げたものの續きであるが、その述べるところが、身體の發育を障碍する事項であつて、前の題目を付けるよりは、『小兒取扱法の誤り』といつたはうが、穩當でありますから、此題目を付けたのである、讀者諸姉その意を諒して御熟讀あらんことを冀ふ。

前號に述べたのは、小兒が生れてから身體の發育して行く有様を數字的に顯はしたのでありますが、この數は多數の小兒を檢査して、その平均を出して得たので、只標準に過ぎないのであります、それ故この數通りに行くものではなくて、大抵はこれより少くなかつたり、または多かつたりするのであります。それで縱令それが少かろうが、多かろうが、それで小兒の出來が惡いといふことはいへないのでありますが、その多いといひ、少くないといひ程度問題で、非常に多かつたり、又は非常に少かつたりすれば、それは普通ではないのでありますから、注意を致さなければなりません、それならばどんな所に注意すればよいのかと申しますと、それは甚だ澤山ありまして、それを皆お話すれば二三年位はかゝりますから、それは到底出來ないとして、只今は最も必要なことを二ッ三ッお話致すことに致します。

さて小兒が生れると、已に自然に發育して行くべき能力を備へて居るものでありますから、その自然の

有様にそむかないやうにして居れば、たいした間違はないのであります、併しそれかといつて、生れた小兒に衣服も著せず、汚れて居る身體を清潔にしてもやらないといふことは、大變な間違であつて、そして一番注意してやらねばならんことであります、小兒が生れるとすぐ産婆が小兒を入浴させて、身體を綺麗に致しますが、その次に衣服を著せることが甚だ不注意であります、經驗のある御婦人方は、そのやうな間違はありますまいけれども、御若い御婦人で、殊に初めてのお産であると、往々此間違をなさることがあります、それは何かと申しますと、小兒が生れる前から種々の用意をなさるのに、先づ第一番に小兒の衣服を拵へるのでありますが、その衣服は甚だ立派であつて、衞生上の注意といふものは少しもないのであります。生れて來たばかりの小兒が衣服の綺麗なのを好むといふ筈はないのでありますから、綺麗な衣服を拵へてやる必要は少しもありません、只清潔といふことに注意してやればよいのであります、それ故衣服を拵へるのには、色の著いたものは一切用ひないで、純白が最もよいのであります、殊に近頃の色物は、化學的の藥品を以て染めたのでありますから、それを生れたての小兒に著せると、皮膚に觸れただけで、皮膚の病氣を起したりすることがあります、またそれが何かの場合に小兒の口についたりするときには、直接害をするものであります、また小兒が生れたときに、胎毒を下すといふて、色々のものを小兒に飲ませる人がありますが、これは甚だ誤つたことであります、普通飲ませるのは五香湯と申しまして漢法醫は、これを使つたものであります、關東ではマクリといふものを飲ませる習慣がありますが、これ等は皆下劑でありますから、それを飲まされた小兒は下痢を起すのであります、その時下つたものは、カニババと申しまして黑茶色のものでありますが、これが出ると胎毒が下つたものと考へて居るのであります、これは大きな間違で、この黑いものは胎毒の親分でもなければ子

分でもありません、當然小兒の腹中にあるべきもので、小兒が母の胎內に居た時に飲み下した羊水や、胎垢(胎兒の身體から出る垢)などであります、それ故こんな物は早く下つたはうが良いには、相異ありませんから、マクリや五香湯などを飲ませるのも惡いことではないのですけれども、こゝが注意すべきところであつて、その惡いものを下す爲には、下劑もなにも入用はないので、マクリや五香湯よりはまだ良い下劑が母の身體に備つて居て、小兒に飲ませるやうになつて居るのであります、それは初乳といふものであつて、母がお產をしてから二三日間位に出る乳であります、この初乳の成分は普通の乳の成分とは大變差がありまして、それで下劑の作用をするのでありますから、これを飲ませば、カニババは直ぐ下つて了います。また胎毒といふことが素人の頭の內に餘程深く浸み込んでゐますが、この胎毒といふことは全く醫學上からいへは意味のないことでありますから、胎毒といふことは一切口にしないやうに願ひたいものであります、小兒が生れながらに母の病氣を受けてゐることがありますけれども、それはまたその病氣の遺傳といふ名稱を付けるべきものであつて、決して胎毒ではありません、黴毒は小兒に遺傳して、生れたまゝの小兒の顏に黴毒の疹があつたりすることはありますが、このバイドクといふことを訛つてタイドクといふやうに成つたものだろふと思はれます、母の胎內には毒は少しもありません、ことで一言申して置くことは、素人は小兒に疹が出ると、すぐタイドクとかバイドクとか診斷を付けて、醫師に向ても、この兒はタイドクが强くて困ります、と申されることがありますが、そんなことを曰はれた醫師は返答に困ります、タイドクといふものは世の中に存在して居ないものでありますから、醫師でも、それを知つて居る筈はありません、それからなぜそんな疹が出るかと申しますと、それは小兒の淸潔法が不十分な爲に、抵抗力の弱い皮膚が、不潔物の爲に刺戟せられて、出來るの

でありますから、タイドク〳〵といつて、小兒の罪のやうに申しますけれども、實の所は母親の不注意といふことが原因になつて居るのであります、それ故下劑を飮ましたつてありもしない、タイドクの下る筈はなく、從つて疹の治る筈もありません、それよりは清潔法に注意して、適當の藥を用ふれば、すぐに治るものであります。

小兒を育てるのには母の乳を用ひないのは良くないといふことは、已に謂はずとも知れ切つたことでありますが、これと反對にいつまでも、母の乳ばかり與へて外のものを食べさせない人がありますが、これはまた大した間違ひであります、小兒に齒が生へるといふことは、何んでも咬んで食べることが出來るやうになつたことを示す變化でありますから、乳を止めるのは齒が生へ初めた時分にするのは勿論のことであります、そして一番先きに生へる齒は門齒といつて、前の齒でありますが、これは七ケ月頃には出るものであります、併し二枚の前齒ではまだ十分に、咀嚼をすることが出來ませんから、前齒が出たからといつて急に乳をやめて、外の物を食べさせるといふのは、極端のやり方であつて、初めは母が口の内でよく咀嚼して小兒に與へるのであります、大抵生後二百二十日目位から外の物を食べさせるのであります、それには牛乳を適當に稀釋たものが良いのであります、その外菓子、スープなどもよいのでありますが、味のあまり劇くないものを用ふるのが良いのであります、それから段々と粥や麪麭や近頃流行のミルクフードの類も亦適當した食物であります。このやうにして生後一年位の間には全く乳を止めて了ふのであります、一年以上も母の乳を飮ますことは、小兒の身體を弱くするものでありますから注意せねばなりません、世間で可愛がられる小兒は身體が弱いとか、一番大切な小兒は身體が弱いといふのは、あんまり永く乳を飮ました爲めであります。

また小兒の皮膚を強くする目的だといつて、冬の寒

むいときに、年のいかない小兒に夜冷たい寢衣を著代へさせて得々として居る人がありますが、只それだけならば、まだ良しとして小兒が感冒を引いて居るときでも構はずに、夜には必ず寢衣に著代させ、朝起ればすぐ冷たい衣服を著せるといふことをする母があります、これは實際のことであつて、よく實驗することであります、夏ならばそういふ風にすることは害はありませんで、また誠に良いことでありますけれども、冬の寒いときには見合はせた方が良いのであります。それからまたモー一歩劇しくなると小兒に毎朝冷水摩擦を行はせる人があります、これは全然止ねばならんことであります、なる程冷水摩擦は大人に效能のあるものですけれども、それで以て小兒にも效能が多いと思つて、年の少い小兒に行ふといふのは、甚だ誤つた考へであります、全く效能がないばかりではなく、却て害になるものであります、小兒が感冒を引きやすいとか、夜よく寢ないとか、食物が進まないとかいふのは、大抵冷水摩擦を行ふ小兒に多いのであります。若し強いて小兒に冷水摩擦を行ふとするならば四歳以上になつてからでなくては、決して行つてはいけません、これを行ふことにつきましても、色々注意すべきことがありますけれども、それはまた時を代へて述べることに致します。

右に述べたことは普通世間で行はれてゐる惡習慣でありますが、それを惡いとは知らないで、行つて居る人もあります、此頃のお若いお婦人方は、大抵こんなことは御承知でありますけれども、老人のある家庭では、老人の言ひ付けで惡いといふことを知つて居てもそれを改めることの出來ないといふことがあります、老人と若い者との思想の衝突といふことは、斯ふいふことに原因を持つてゐることがありますから、家庭の顧問者たる老人は、よく心得て居なければならんことであります。

小兒の怪我（承前）

骨折、小兒の骨は非常に彈力に富で居るから、老人の骨の如く碎けることは少ない、併し惡戯盛りであるから、骨折を起すことは比較的多いのであります。又治癒することも頗る容易であるが、骨の發育が盛であるから、一側の手とか足とかゞ折れて、その發育に障碍を來し、又は異常の發育をすれば、著るしく他側の手足との權衡を失なつて、將來甚しきチンバとなるものであります。それ故小兒の骨折は、餘程注意して取扱はなければならぬことであります。

先づ骨折を起した疑のある時には、なるべく身體を動かさずに衣服を脱がせなければならぬ、若し洋服或は股引のやうなものを著て居る時には、剪か小刀を以て截り解いて取除く、靴や靴下の如きものも、足を怪我した場合には、無理に脱がせずに、矢張切り割いて脱がせなければなりません。而して血が出て居るならば、先づこれを止める。

骨折があれば、小兒はその部分に當つて疼痛を訴へる、而してその手足の働が妨げられて、手足を上げたり廻はしたりすることが出來なくなる。これを檢査するに、大抵其部が腫脹れて、骨の位置が變じ、壓さへて見れば一種の音を發する、且つ手足の位置が異様になる、併し手足を動かしたり、壓したりして檢査することは嚴禁で、これは全く醫師が檢査して骨の折れ方を診斷する時に行ふべきものであります。

何故骨折を起した者を、動してはならぬかと云ふにこれには大に理由があるのであります。まづ骨折を分つて二つに區別することが出來ます、其一は單純骨折傷、或は皮下骨傷、も一つは複雜骨傷である、其單純骨傷と云ふのは、皮が破れず、其の中の方で骨が傷付いてるのであります、複雜骨傷と云ふのは、皮膚も筋肉もともに傷付いて骨迄通つて居るのを云ふのであります、その違ひはどこに有るかと云

ふに、只皮膚が破れて居ると居らぬだけの違ひでありまするが、扨之れが大變の違ひなのであります。何故かと申しますのに、皮膚に傷がないならば、骨さへ上手く癒合ればそれですむのですが、皮膚が破れて居れば、其處から何が這入るかわからぬ。普通の膿を造る黴菌が這入つたゞけでも容易に膿を持つて其處が腐つて、熱が出て、遂に死んで仕舞ふ事は尠くない、よし生命丈は助かつたにしても、前の皮下骨傷に比ぶれば其治療方が非常に遲くて、其上不具になり易い、か樣な甚しい差は只皮膚が破れるか破れないか、卽ち皮一重の差であります。

それで初めは單に皮下骨傷であつたものも、不注意に手足を引張たり動したりすれば、中の方で折れた銳い尖つた骨が、皮を破つて突き出る、これで以て直今迄は、格別の事でもないものが、忽ち恐る可き複雜骨傷に變ずるのであります。それであるから骨傷の疑ひのある時には、妄りに動してはならぬと云ふ事を重々申すのであります。

次に如何なる取扱ひをすべきかと云ふに、まづ靜かにして、置いて、ステッキ、蝙蝠傘、或は竹でも板でも、又は麥藁、子供の持つてるおもちやの鐵砲の樣な物でもよいから、適當な副木になるものをさがして或はそれがなければ厚紙でも新聞紙をいくまいでも卷いて、それを手なり足なり折れた處にあてゝ手拭なりハンケチなりで二三ヶ所縛つて置く、但しこの副木は短くてはいけません、足ならば腰の所から足さき迄の長さが必要である、手ならば肩から手さき迄の長さでなければならぬ。その副木を綿でもつて澤山卷いて、側方から手足にあてゝ縛り付ければよい、その縛り付ける處は、上肢なれば肩と肘と手頸の處、下肢ならば腰と膝と足頸の處、すべて關節の處で縛り付けるのであります、かやうに仕た上で靜かに吊臺の樣な物に乘せて病院に運搬仕なければなりません、これらはすべて前に申した複雜骨傷に仕ない樣に注意するのであります。

どうか致しますと、又初生兒の骨折を起すことがあ

ります、これは生れます時に、難産で手や器械で種種の方法を施すときに、起る事が最も多いのでありました、この時にはその折れた手や足は、繃帶か又は絆創膏でもつてお腹に固定致します、つまりこの場合では小兒のからだそのものを副木に致す譯であります。

骨折には種々なものがありまするが小兒はよく相撲を取つたりしまするので、鎖骨の骨傷を起すことが折々あります、この鎖骨が折れまするど、鎖骨の眞中の處が腫れ上りまして、其方の肩が下つて居ります、而してその腕を胸につける事が出來ず、前内方に捻れて居るのでわかります、この時にはまづ、腋下に澤山物をつめて、胸と腕の間に十分綿をあてゝ肘の所で直角に手を曲げて、その位置に繃帶或は絆創膏をもつて固定するのであります。

こゝにも一つ申上げて置きまする事は、關節を造つて居る二つの骨の一つがはづれる事があります、即ち脱臼が起る。これは外部から見たところでは、前に述べました骨折と區別がつかぬやうでありますが骨折のやうに絶へず痛みはなくて、多くは動かす時だけ痛みを感ずるものであります、又骨折では折れた所が常に異つた運動を致しますが、脱臼の方では少しは動きましても、一定の方向だけで常に動くべき方向に動かなくなるものであります、又骨折のやうにそこが異様の音を發する事も餘りありません、其外種々見分けかたもありまするが、これは矢張醫者の仕事でありまして、妄りにかやうな檢査をする事は大禁物であります。こゝに述べましたのは、只骨折と脱臼には異ひがあると云ふ事を申しのべたまでゝありまするから、決して無暗に引張たり捻ぢつたりされては困ります。

脱臼は古くさへならなければ、容易に整復が出來ますけれども、最初に無暗な事をされまするど整復が非常に困難になり、或は出來がたくなるのであります、それで只綿をあてゝ繃帶で吊つて置く位にして早速醫者に連れていくやうにいたしたいものであり

ます。然るに腕がぬけたとか、手が脱れたとか云ひますると探つたり軟かに揉んだりする位はまだしもでありますが、近所のお老爺さんなどがどれ私が直してやるなどゝ云ふ譯で力まかせて引張り捻つたりして悪くしてくれる事が屢ゝあります。又骨つぎ揉療治などゝ云ふ看板をかけて置く所につれて參りますると、これには成程只長い間の經驗でよく、脱臼を整復するものもありますが學理を知つて居る譯ではありませんから、脱臼と骨折とを誤まつたり仕て往々無法な事を致す事があります、其爲に前に申したやうに成べく動かさぬやうに仕て癒合する事を謀らなければならぬ骨折をしきりに揉み動して其の骨と骨の間に皮が出來て仕まつて、所謂假關節と云ふものになつて、到々骨がつがらなくなつて一生の不具を造る事があります、これは實際屢ゝ見る處でありますから、矢張り成べく早く醫者の處に行つて學理に適つた整復法に依て直すやうに致したいものであります。

家庭衛生

日常生活の衛生

如何に住居し、如何に衣服を著、如何に食物を取るべきかと云ふことに就ては、毎號本誌にそのお話があるやうですが、私は日常の生活を一纏めにして、衛生上から觀察して見たいと思ひます。衛生と申しましても、徒らに恐るべき病氣を數へ立てゝ、病人の守るべき處方に從つて生活するといふことではない、その目的とする所も、多數の病弱者や老人を保存すると云ふのではない、なるべく强壯な仕事に堪ゆる精神と身體を併せ有して、十分その天職を盡して目出度く終を遂げしむるに在るのでありませう。果してさうとすれば、いくら强壯な身體を以て居つても、若しこれを適當に使用し得る所の人格、性情

が無かつたならば、その立派な身體も寶の持ぐされで、何の役にも立たぬ譯であります。それで茲には特に精神的の方面から日常生活を論じて見たいと存じます。

兎に角一人前の身體に育つて來た人は、これは誠に幸福な人であるが、その身體にはそれだけの役目がある、而してその役目を完ふするには、無益にその力を費さずに、最も適當に衞生的に仕事をすることが必要であります。

先づ持續的に身體も精神も、健康であらうと云ふのには、自分で自分を、能く知つて居ることが大事である、卽ち自覺的の人格が無ければならぬ事であります、人格と申しますものは、自覺と意志と感情とを引くるめたものを申すのでありまして、從つてこの三つの性質に相當する三樣の働きがあります、卽ち何が最も自分に適當して居るか、如何にこれを行ふ可きか、而してこれに由て、其仕事を容易に樂しむで爲すことが出來るか、換言れば自個觀察、自制或は克己及び喜悅の三つであります。自個觀察は、自分の能力及び性質を知るに必要なことでありまして、卽ち自分自らを明かにするのであります。人には各々適當して居る仕事があり、又適當して居らぬ仕事がありますので、この自個觀察に依て、初めて自分に最も適當して居る仕事を選擇し得るのであります。若し自分の性質を明かにせずして、不適當なる仕事に從事するならば、苦しむで、妄りに力を費し、その神經を害する事が甚だしく、常に其職務に對して不滿を懷いて、而かもその成績が良くない、これは單に頭腦を使ふ人ばかりでなく勞働者に於ても同樣であります。人間が自分の好きな仕事を爲るのと、嫌ひな仕事を强てするのとは、その精神上に於ても、身體上に於ても、其の影響に非常な違ひがあるものであります。それで元來、美術、音樂などに巧みな者を、大工や、土方にするなどゝ云ふことは、誠に愚な事で、これと反對に大工や土方に適當して居るものを、美術家や、音樂家に

仕様と思ふのは誤つた次第であります。

自個観察は、又各個の器官に對しても必要でありまして、健康なる器官は、通常氣が付かぬものであります。即ち鼻とか、眼とか、耳とか云ふものでも、何か異常があれば大に氣になりまするが、健康な場合には、有るか無いかも考へないものであります。又身體の器官は、働き過ぎますると、疲勞の感覺が起りますが、正當の疲勞は、寧ろ快いものであります。然し又不健康なる過勞の感覺があります、これは通常の疲勞の感覺とは明かに異なつたものでありまして、この病的の疲勞の場合には、人は刺戟性に成て、滿足、幸福と云ふ感じが無く、其疲勞した神經は、更に甚だしく仕事を仕て居るやうな氣のするものであります。衣食住の衛生は、健康及び早逝の關係に付いて、常にこの疲勞の影響を論ずるのでありまして、惡しき住居、惡しき食物並にこの過勞が一緒になつて、大害を來すことを明かに教へて居ります。

正しき自個観察は、その身體に相應して居る仕事の量を示すべきものでありまするが、その量と申しましても、無論單に勞働の事のみではなく、娯樂遊逸と云ふ事に就ても、その度合を考ふべきものであります。世の中には立派な家に住ひ、上等の食物を採り、其仕事も至つて樂であるのに、早く老ぼれて仕まう人が往々あります。これはどう云ふ譯かと觀察して見ますると、茶屋料理屋で夜深をして十分に睡眠せず、逸樂に耽ると云ふやうな人であります。

然しこの自個観察も、餘り深入を致しますと、却て害を招く事がありまして、誤つた自個観察となります。即ち泰然として考へませぬと、無暗に心配する事になつて、一寸手足に刺がさゝつても直ぐ、ペストになりはすまいか、破傷風に罹りはせまいかと苦勞をする。或は少し頭痛がしても、これは窒扶斯では無からうか、いや、どうも腦膜炎であらうと云ふやうに、妄想を逞しくしてくるとやがて、これが病的の恐怖病となつて、即ちヒポコンドリーと云ふや

うなものに成つてしまうのであります。かやうな譯で恐れと云ふものは、稍々不規則な事を見ると、これは大變だと云ふので、病勢を强める、而うすると益々恐れを懷くと云ふ事になつて、所謂幽靈を恐れるものが、急いで逃げる時に、自分の草履がパタパタするので、愈々烈しく幽靈に追かけられると思ふて、蒼くなつて倒れたと云ふ話と同じわけであります。それで衞生上に於て、この精神修養と云ふ事が頗る大切な事で、只身體並に精神上の能力に就て、確固たる自信を持つて居る人のみが、生活上の危險、倦厭に堪へてその職務を樂しみ、生活を喜ぶ處の人たるを得るのであります。

（以下次號）

衞生雜信（二）

○今日の患者は餘りに疑ひ深くして醫師を信賴するの念に乏しく候。水邊の浮萍が轉々として一定所に固定せざるが如く、又商人が物品を賣り附くるに隣りより隣りへと持ち廻るが如く、今日の患者は自己の身を持て餘して、甲醫より乙醫へ、乙醫より丙醫へ、丙醫より丁醫へと云ふ有樣に、轉醫をこれ事と致し居り候。從て自己の內心と既往とを全く醫師に打ち明くるに躊躇致し居り候。これ或は醫師の人格の低下賤劣なるものあるにも由るべけれど、患者が自己を祕密にするは合理的の治療を醫師に期する所以にては無御座候。

○醫師には其守るべき業務祕密と稱するもの〻有之ものにて候へば、患者が自己に告白せる萬事に就ては堅く口を緘じ、決して口外せざるべきは申す迄も無之候。然らざれば醫師は社會を擾亂して、殊更らに事故を釀すの不德漢と相成るべく候。たとへば茲に緣談を取り結ばんとする相愛の男女ありとせんに醫師が其間にたちて、男子には花柳病の既往症ありとか、女子には結核の素因ありとか申し候はんには其事實は事實にせよ、之がために雙方の愛の紐は、敢へなく截斷せらる〻の悲運に會するにては候はす

や。

○されば醫師は高尙なる人格と、純白なる思想と、溢るゝ同情と、陷缺なき理性とを具有せざるべからず。患者は滿腔を披瀝し、內心を曝露し、既往と現症とを精細に腹藏なく醫に語らざるべからず候。ドクトルマグドナルド氏は左の如く申し候『治療の第一步は實に患者の告白なり、患者が過去の放肆、淫逸、罪行等に就き、一々之を告白して之を現在の疾病と對照するに於ては、醫師の診斷治療に向て資する所尠からず。患者も斯かる機會に於て同情に富める聽者に、其內心を打ち明け、聊かにても其苦痛を脫するを利益なりとす。吾人の悲みを悲みとする同情者と、心より打ち語らうの價値は何人も熟知する所にして、吾人は之によりて心を休め、古き縛めも之によりて解かれし心地し、始めて安易自由の感を抱くものなり。而して吾人の境遇に同情せし聽者が吾人の不幸を救はんと誓はゞ、吾人の其人に對する信賴は以て治療的の效果を奏すべきものなり』と。

○人には光明なる方面と暗黑なる方面とあり、平素健康なる時に於ては何人も光明なる方面のみを眺めて希望の步を進むれども、一朝病ひの牀に臥しては只管暗黑の方面のみに意を傾くるものに御座候。換言すれば、滅入る如き、消ゆる如き、暗黑幽暝の中に引き入れらるゝ如き、迚も再び活動の舞臺に飛躍する能はざる如き、極めて悲觀的な、極めて消極的な觀念は、得て病的狀態に發生し易きものに御座候。斯かる觀念は醫師と患者と協力して驅除せざるべからず候。驅除するの途は他なし、暗黑の中に一路の光明を認めて進み、絕望のうちに奮勵の鞭を加へて希望に向て步を運ぶことに御座候。益々氣を腐らし、いよ〳〵沈衰するが如きは、自ら身を亡ぼすものと稱すべく候。

○抑も地上に人類の生活するは偶然にあらず、自然は人類によき發達と健康とを望み居り候。されば自然の方則は健康の方則に有之、之を守れば健康を生じ、之を破れば病氣を醸すものに御座候。自然は故

て人類が苦しみ惱むを以て快く感ずるが如き無情のものに無之、云はば自然の方則なるものは人類の繁榮を望む愛の方則に外ならず候。然るに自ら病氣をつくり、自ら健康を害ふが如きは獨り愚の骨頂なるのみならず、自然の心と要求とに反する無謀の措置と申すべく候。

○國の法律は之を破る者を罰し、知らずして之に抵觸する者をも假借仕らず候。故に國民としては是非其法律の一班を心得べき筈に御座候。健康の方則も之と同じく、知らずして之に牴觸することあるも『病氣』と云ふ宣告を得くべき筈に候へば、人類としては必ず一應健康の方則を知悉し、之を守らざるべからず候。吾人の病氣は必ず健康の方則に違反せるに因するものにて、或は自ら知て此方則を破り、或は知らずして之に牴觸し、或は祖先、兩親、乳母、友人等が知りて若くは知らずして此方則に違反せるに基づけるものに御座候。

○西洋の或る學者は『病氣の背後には違法あり』(Back of every physical ailment, there is a broken law.)と申し候ひしが、吾人は牛飲馬食して健康を保つ能はず、吾人は淫逸放肆にして健康を得る能はず、吾人は苦慮煩惱して健康を樂しむ能はず候。天體は一定の軌道を走るによりて衝突せず、吾人も自然の方則を守るにより健康の破壞を免るべく候。彼の傳染病毒の如きは何れより身體内に侵入するか頗る不明にして、自然の方則に反かざる健康者を侵すが如きこと往々有之候へ共、之れ其人の『健康』と稱するものが、未だ『病毒に對抗し得るだけの程度』にあらざるを示すものにて、『完全なる健康』に對しては流石の病毒も如何ともする能はざるものに御座候。感冒に乘じて肺結核の來り、腸加答兒に乘じて赤痢病の發生するが如く、身體に隙間のあればこそ病毒に附け込まるゝものに御座候。

○傳染病流行の時にありて、病毒に乘せらるゝの虞なしと稱するものにして、尚ほ往々之に侵さるゝものゝ有之候は、成る程、身體は頗る强健にして乘せ

らるゝの弱點なしと雖も、精神的に恐怖の念が病毒を體内に引き入るゝこと有之候。傳染病を恐るゝ者に患者多きは全く之が爲めにして、恐怖の念は身體の抵抗力を弱むるものと見做すべき儀に御座候。

○完全なる健康とは、精神と肉體とが共に健全なる狀態を指すものに候へ共、現今の人士は自ら精神を不健全にして、肉體の健康のみを熱求し、或は肉體の不健康のみを訴へ居り候。これ明かに『健康の墮落』と申すべく候。

（未完）

食事の注意（承前）

食事の際、飲料を用ふべきか否かの問に對しては、先づ用ひて宜しいと答へる方が適當です、何故なれば、食事の時に飲料を用ふると、食機が振ふし、且胃の中に這入つては、消化液の分泌を高めるからであります、併しこれも適當と云ふ度を外してはなりませぬ。

然らば飲料として何を用ふるかと言ふ問題が、直に起つて參ります。斯かる場合に用ひらるゝ飲料は、極めて多くありますけれども、單純の水を選ぶのが何よりです、水は、他の刺戟性を持つたものに比較して、一番よろしい、其價も廉く其性質も理想的で天然が與へてくれた何より重寶の飲料であります。併しこれも注意をせぬとまたこのために害を受けることがありますから、例へば清潔なものを用ひないとか、或は不適當にも、大量を用ふる如きはよく無い、最も水と殆んど同じ性質のもので、飲料に供せられるものも多くありますが、要するに刺戟性の成る丈け少いものを、清潔の度に於て、適當に用ふることが大切です。

斯くして食事が終つた後には、口内をよく洗つて、齒の掃除をしなければなりませぬ、齒垢に結核菌のやうなものが附著して、其まゝ胃に這入たり、又齲齒のために、舌や其他の粘膜に傷をつけて、こんな所から黴菌が這入ることもあります。

食事後には、十分なり、二十分なり、身體を横にして、靜かに休むを可とす、食事の時間を節し、嚙むものも嚙み終へずして、箸を措くや直にそれぞれの業務にかゝることは宜しくない。この事に就て、犬の試驗が行はれた、卽ち食事後或ものは一定時休憩せしめ、或ものは、食後直ちに兎狩をさせた處、どうも休ませて措いた方が、消化も早いし且容易く行はれることが明となつた。

この時に眠ることの必要は無い、只身體が横に安かになつて居て、そして精神を費さぬやうにすればよろしい。

食過ぐれば學に倦む（Plenus venter non studet libenter）

と云ふことがありますが、これは、生理上爾かあるべき筈のことです、卽ち消化が盛に行はるゝには、消化器の方へ、血液が多く參りますから、從つて腦に循る處の血液と云ふものは減じて來る、其結果、腦の方では休憩を要求するので、若し此場合に、何か腦髓を費すことが、劇しくなると、勢ひ多くの血液が入用となつて參ります、そこで消化器の部分に循る血液の量が、減じて來る、其結果、消化が思ふやうに出來ぬことゝなる、これは全身に循環して居る血液の總量が一定して居るからで、丁度一定の收入ある人の細君が、浮世の流行を追つて、一時に高價な贅澤品を購求した場合には勢ひ、主人公や、子供の小遣を節減しなければならぬと同じ理窟です。

それは措置き、前に戻つて、此横になつて休むことです、これは昔は、食事の後は立て居る方がよい、我邦ならば坐つて居るのが宜い、或は歩行のが宜いと言はれたので、夢にも食後直に横にでもなると、禮儀に背くと言はれたものでありますが、今日では佇立、坐位、歩行等より、横臥の方がよいと云はれるやうになつて參りました。

夕食果して後、夜の眠りに就く間は、どれだけの時間にしたらよいかと云ふことは、これは、いろ〳〵に云はれて居る、併し、夕食後、就眠時まで、永く

休みの時間を置かねばならぬと言ふことは、チト疑はしいと思ふ、これは要する所、食物の種類と食事の方法によつて、消化の時間がちがつて來るから、一概には云へないけれども、一時間か二時間も立てば、眠つてもよいと思ふ、食後直ぐに眠りに就くと云ふことは、宜しく無い。

要するに、以上述べたるが如く、食事のことは、決して小さい問題ではない、經濟上のことは、別に措いても、人間が健全な身神を捧げて、其職責を果す上に於て、實に重大な問題であることは、何人も反對することが出來ませぬ、食事のことを忽諸に附する人は、我身を愛する人と申すことが出來ませぬ、我が身を愛せぬ人は、我が職責に忠實な人とは申されませぬ。

それでありますから、始終うまく食事をして、そして日々消耗する所を補つて行かねばなりませぬ、つまり物質交換が完全に行はれて居れば、その間は尋常の身體を保持して居るのです、これが不調和となると、身體の異常が起るのであります。

殊にこれは御婦人達の御注意を促したい問題であると思ひます、即ち食事のことにたづさはる方が、どうかうまくして、食べさせたいと云ふ心で、骨を折つて頂きたい、同じ品物でも、手を代へ、法をかへて調理すれば、中々種々のものが出來ます、そして食機を振はせるのが婦人の勳です、何時でも同じもの計りを用ひて、同じ仕方で料理して居るとどんな珍味でも厭になつてしまひます。どうか極端に流れず、單調に失せずして、細工は流々、膳立御覽と云ふやうに、食事のために心を須ひるに吝ならざらんことを願ひたい、そして胃健なれば國强しと云ふことを常に頭腦の中に持つて居て頂きたいと思ふのである。

大日本婦人衛生會記事

○本會總會並懇親會

今年の總會及び春季懇親會は、時日會場等に障ることのみ多く、いたく延引せるが、やうやく五月二十八日午後一時より、小石川區白山御殿町なる東京帝國理科大學附屬植物園内に於て擧行せられたり。式場は同園集會所にして、卓上には所がらとて珍らしく美くしき鉢植の花卉の幾種となく打揃えられたるさへあるに、翠も深き庭園の眺めまたいふばかりなし。やがて定刻に近き、式場に集合せんとするに先だち、來賓の新聞雜誌記者諸君は、泉水の中島わたりに集へる來會者一同を諸方面より同時に撮影し、直ちに式場著席の上、開會を告げらるゝや、會長鍋島侯爵夫人の臨場なかりし爲、副會長濱尾男爵夫人立つて開會の挨拶あり、次で書記より會務の報告をなし、これにて式を終り、引續き餘興に移りしが計らずも坪井理學博士のアイヌ視察談ありて、その奇異なる衣食住の有樣より、彼等があらゆる生活狀態に關して興味ある、又時に大に學ぶべき有益のことゞもを聞き、次で細川風谷の講談何時もながら上品に面白く、只時間の都合上一席のみにて稍ゝ短きを惜まれたり。然れど會員何れも滿足にて或は庭園を逍遙し、或は茶菓を喫し、時間の限り樂しく語りあひつゝ、轉たゝ會員相互の睦びを厚うし、午後五時頃に至り全く散會せるなん、先は目出度總會、樂しき懇親會にはありける。

此日の空模樣いと怪しく、諸役員の心遣もたゞならざりしに、一日降りもやらで、散會と同時にはら〳〵と催したるは幸なりき。

會場のいたくかたより、時日の餘り宜からぬに、二百人餘りの來會者ありしは盛なりきと謂まし。

來賓の主なる人々の中には、土方伯、理學博士坪井正五郎、醫學士栗本庸勝、ドクトル富士川游等の諸氏並に諸新聞雜誌記者諸君ありき。

○本會例會及講話會

六月四日午後一時半より神田區一ツ橋通りなる共立女子職業學校内に於て本會例會を開き、同時に通俗衛生講話會を催し、婦人一般の聽講を許せり。定刻に至るや聽衆既に堂に滿ち、最初紹介につれて、二木博士登壇、先づ乾濕に依て腸窒扶斯菌の發育に大差あることを示せる標本、蠅の這廻れる足跡に恐るべく發育せる窒扶斯菌の聚落、窒扶斯に因せる腸の潰瘍及びその穿孔せる圖、その他血清等數多の標本を供覽せしめられつゝ、腸窒扶斯の沿革より菌の性質、蕃殖、抵抗力、その侵入經路、症狀、診斷、療法を述べ、流行論よりこれが豫防法に及び公衆、家庭並に個人の豫防法に至るまで、種々面白き例と譬論と格言とを以て、一時間餘に亙つて懇切なる詳細の説明あり、此間聽衆何れも時の過るを忘れ、偏に興趣の中に此の恐るべき病魔に就ての學理を會得せしめられ、眞にその恐るべきを知つて、又已に恐るるに足らずとするの自信と覺悟を得たり。

右了つて暫時休憩の後、富士川ドクトルは、老若男女と云ふ題の下に、染別けに依て一目瞭然たる數多の表を掲げ、人間の一生を電の如く、而も老若男女を手玉の如く取扱ひつゝ、身體精神の内外表裏を縱横に説きほどき、學理と諧謔にあやなして、目出度く老若男女、人間の一切を説き了はられしは、眞に興味あり且つ有益なる講話なりし。

右兩先生の講話の如何に興味あり且つ有益なるものなりしかは、早くも諸新聞紙の爭ふて其概要を掲載せるに見ても知らるべきが、其筆記の本文は各講師の校閲を經て順次本誌上に掲載すべし。當日出席の役員姓名は左の如し。

鳩山春子　濱尾作子　石川貞子
中濱芳子　羽田三緒子　田村喜代子
山口貞子　宮下咲子　小川幸子
（以上出席順）

○新潟支會地久節祝賀式

新潟支會に於ては五月二十八日午後一時より、同市婦人教育會と聯合の上、新潟師範學校附屬小學校に

於て、地久節祝賀會を擧行せり、出席者約百名、最初高田せん子開會の挨拶をなし、次に來賓の祝辭、續て諸種の餘興等ありて頗る盛會なりき。

○本會入會者

○事務所申込

●徳島市徳島町字厩町　贊成員　高島一男
●同市寺島町　同　賀川一郎
●同市富田浦町字中町　同　江口入衛
●同市八百屋町一丁目　通常會員　上田たけを子
●同市通町一丁目　同　門田かた子
●同市八百屋町三丁目　同　馬詰あさみ子
●同市富田浦町字幟町　同　服部とみ子
●同市福島本町字中町　同　眞野はな子
●同市寺島町字本町　同　中川きく子
●京都府天田郡　同　郡立高等女學校
●小石川區新諏訪町四番地　贊成員　檜山鐵三郎

○伊澤米子紹介

●府下雜司ケ谷百番地　通常會員　大野うの子

○竹山支會長紹介

●　特別會員　林つま子

○新潟支會入會者

○高橋顧問紹介

●　特別會員　島村よう子
●　特別會員　高山夫人

○中山幹事紹介

●　通常會員　矢野さう子

○改姓名

舊姓名　隈川京子
新姓名　村岡よね子

○轉居

●淸國上海日本郵船會社內へ　深野英子
●臺灣臺北西門外街二の十五へ　渡邊はる子
●京都市吉田町中大路へ　富田たま子
●伊豫國西條町明屋敷へ　關藤ちゑ子
●門司市老松町一、戸早方へ　關野秀子
●麴町區下二番町四十一へ　加藤照麿
●山口縣吉敷郡大内町字堀、古田方へ　時岡田千代子
●兵庫縣明石相生町(東詰南入)百五拾四へ　岸松子
●神戸市山本通四丁目百六十一の六へ　村岡よね子
●日本橋區馬喰町四川岸へ　日本橋高等女學校
●本鄕區新花町九十七へ　大澤とよ子
●麴町區下二番町四十一へ　加藤常子
●麻布區富士見町三十三へ　長與閑子
●淺草區仲の町五へ　長谷川たよ子
●相州鎌倉雪下九八三覺成寺前へ　杉本清美子
●北海道石狩國樺戸郡月形村官舍　五十嵐安子

新案特許一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣



本品の特長

一、根元にコロップを裝置せるにより舊式のもの〻如く硬からず膚ざわり軟らかなり

二、皮膚を摩擦する事少きゆゑ頭のはげる憂なし

三、頭痛癖ある婦人にも用ひて爽快を覺えしむ

四、二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介する憂なし

丸髷	金十五錢より金七十五錢迄
島田髷	金三十錢より金壹圓五十錢迄
銀杏髷	金二十錢より金六十錢迄
送料	各八錢

◉諸かもじ製造販賣 東京市神田區豐島町十七番地【振替貯金口座一八一八八番】田中金三郎

◉小賣特約店

京橋南傳馬町 大西白牡丹｜本郷三丁目 燕康｜淺草駒形 百助｜淺草駒形 紅勘｜神田區須田町 三井屋｜日本橋通二丁目 柳屋

特約店

神田區橋本町三丁目 勝本治助
日本橋區田所町廿一 山三商店
同 横山町一丁目 安井治太郎
同 馬喰町三丁目 萬新商店
日本橋區若松町 松葉屋紋太郎
同 横山町一丁目 天野源七
同 馬喰町三丁目 阿部錠
同 橘町四丁目角 島村商店
日本橋馬喰町二丁目 飛川商店
同 横山町二丁目 江川小間物店
同 横山町二丁目 森本支店
外全國到る所の小間物店にあり

タカヂアスターゼ

●消化不良に就て熊本醫學專門學校長谷口博士は曰く、澱粉不消化の徴候たる胃の不便、膨大、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積、便秘、前頭部疼痛及下痢を生じ營養不充分なるが爲め筋肉及體力を喪失する者はタカヂアスターゼを用ひ快速に治するを得べしと、又本邦消化機病學の泰斗長與博士は曰く、予の實驗に依ればタカヂアスターゼは獨り胃の澱粉不消化を治するに有要なるのみならず慢性下痢に於ける腸不消化をも治するに適當なるを信ずと、信ずべき統計に徴すれば消化不良の七割五分は實に澱粉不消化に起因すされはタカヂアスターゼは胃腸障害に對する最も有力なる藥物なり。

タカヂアスターゼ發賣元三共合資會社は東京市日本橋區南茅場町より同區室町三丁目へ移轉せり從て當分本劑の包裝には新舊町名番地のもの混同して販賣せらる孰れも眞正品なり

●世に幾多の摸造品及類似品あり高峰博士發見のヂアスターゼを求めんには必ずタカヂアスターゼと御指定あるべし各地の信用ある藥舖にて取次販賣す

●消化力强大なるは總てのヂアスターゼ劑中タカヂアスターゼを第一位と爲す近く官報を以て發表せられたる本田博士の學位論文に徴するに坊間に販かる、多くのヂアスターゼはタカヂアスターゼに比し數倍乃至十數倍を用ゆるにあらざれば之と同効を收め難きなり、此くの如きは高峰博士の製法が他の總てに超絶して完全なるに由るものにして、これ以て一は眞正品は他摸造類似品たることを區別し得るなり、

タカヂアスターゼの說明書は發賣元たる東京市日本橋區室町三丁目拾番地三共合資會社へ御申越に從ひ無代郵送す



●營養增進の目的を以て虚弱者貧血者重病者等にタカヂアスターゼを用ゆれば能く消化を佳良にし營養自ら增進し體力速に恢復するを見る、殊に肺結核患者に之を應用すれば其効力著明なりされば大阪高等醫學校長佐多博士は曰く、タカヂアスターゼは予が數年來肺結核患者の消化補給劑として用ひ有効を認めたる所とすと、又在京の栗本博士は曰く今や予は實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著効を確認すと、柴山博士も亦此目的にタカヂアスターゼを使用したる結果多大の良成績を擧けたることを公示せられたり

●藥効均等論は輓近醫學者間に唱道せらる、所なり、内務省橫濱衛生試驗所長西崎藥學士の研究論文中に曰く、タカヂアスターゼは各購求の時日と場所とを異にするものなれども其糖化の効力は固よりグリカーゼの効力も亦常に一定せりとタカヂアスターゼの効力每常一定なるは其特長なりこれパークデビス社の如き規模の宏大なる者に於て始めて見るべきのみ。

●タカヂアスターゼの用量は一回〇・一—〇・三錠劑（〇・一三）なれば一錠—二錠毎食後直に投與すべし而して此用量はタカヂアスターゼにのみ限ることを特に言明す

廣告

過般役員會の決議に依り、本會七月例會は、本年に限り、都合上休會致事と相成候間、此段會員諸姉の御了承あらむことを乞ふ。

明治四十三年六月

私立大日本婦人衛生會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衞生會徽章規程

第一條　大日本婦人衞生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





○本會徽章料左の如し

○通常會員章

第參號

メツキ製拾貳錢、送費六錢

第貳號

正銀製四拾錢、送費六錢

○終身及特別會員章

第壹號

七拾錢（黑塗箱入送費九錢）

六拾錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會並に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

○入會注意

○御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと◎東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收人差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納附相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候◎追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす◎會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麹町區富士見町郵便局）宛振出しあるべし◎會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし◎轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

○會員御紹介

下され候御方には其人數丈の本會雜誌を進呈す

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　◎特別廣告一頁拾四圓半頁其二分一以下同之

本誌一部定價貳拾錢

發行所　東京市麹町區富士見町二丁目三十二番地
私立大日本婦人衞生會
（振替貯金口座東京一〇六〇〇番）

編輯兼發行者　東京市本郷區駒込追分町三十番地
荘司秋次郎

印刷者　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
今井甚太郎

印刷所　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
杏林舍

明治四十三年六月十六日印刷
明治四十三年六月二十日發行
（毎月一回二十日發行）